ISSN 0918-3035

総社市埋蔵文化財調査年報 12

（平 成 13 年 度）

２００３年３月

総 社 市 教 育 委 員 会

序

岡山県三大河川の一つである高梁川によって形成された総社平野は，古代からこの地にすむ人々に豊かな実りを与えてきました。この恩恵のもと総社市は稲作開始期より栄え，吉備中枢の地として数多くの遺跡を残してきました。

近年，史跡の整備・活用は，まちおこし事業の一環として各地で積極的に実施されていますが，本市においても，数多（あまた）ある史跡の保護・活用を目指した文化財保護行政に取り組んでまいりました。とりわけ鬼城山は，史跡整備を視座に据え，平成６年度から遺跡の性格を探るための発掘調査を実施し，多くの成果を上げてまいりました。これらの成果をもとに，平成13年度から本格的な整備に着手いたしました。

この年報において，埋蔵文化財の調査だけでなく，鬼城山の整備状況についても，いち早く伝えてまいりたいと考えております。史跡を整備することによって，より多くの方がその活用をとおして他の史跡にも目を向け，郷土の歴史に触れ，先人の智恵に触れて，文化財の保護・保存にご理解くださるとともに，これからの総社市のまちづくりを共に考える一助になればと考えております。

最後になりましたが，日頃から本市の文化財行政に対しまして，ご指導・ご協力を賜っております関係諸機関及び関係者の皆様に感謝申し上げますとともに，より一層のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

総社市教育委員会
教育長　桒　田　交　三

例　　言

1．本書は，総社市教育委員会が平成13（2001）年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会・試掘・確認調査について，その概要をまとめたものである。

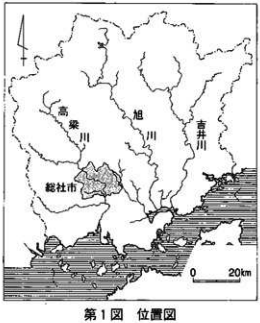
2．本書は，各調査区の担当者である谷山雅彦，平井典子，武田恭彰，前角和夫，高橋進一，松尾洋平が執筆し，それを編集したものである。それぞれ文末に執筆者名を記し，文責とする。全体の編集は平井が行なった。

3．遺物整理及び資料の整理にあたっては，近藤雅子・田中富子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。

4．本書の高度値は海抜高であり，遺構実測図の方位は，国土座標の入っているもの以外は磁北である。

5．本書に関する実測図，写真，遺物等は，総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265－3）で保管している。

6．本書の刊行にあたり，ご指導・ご教示を賜った関係諸機関および関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。



第1図　位置図

目　　次

序　　文

例　　言

1．総社市埋蔵文化財行政の概要

平成13（2001）年度埋蔵文化財行政の概要 …… 1

2．立会・試掘・確認調査の概要

共同住宅建設に伴う試掘調査 …… 7
中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査1 …… 11
中央地区マンション建設に伴う試掘調査1 …… 13
三輪地区マンション建設に伴う試掘調査 …… 15
中央地区共同住宅建設に伴う立会調査 …… 17
中央地区マンション建設に伴う試掘調査2 …… 18
土取り事業に伴う分布調査 …… 20
共同住宅建設に伴う立会調査 …… 21
携帯電話中継局設置に伴う試掘調査 …… 22
農地改変による土取り工事に伴う立会調査 …… 23
共同住宅建設に伴う試掘調査 …… 24
県営ほ場整備事業（原地区）に伴う試掘調査 …… 25
中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査2 …… 27
病院建設に伴う試掘調査 …… 29

3．発掘調査の概要

東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区） …… 31
東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（宮江・延地区） …… 33
史跡整備事業に伴う鬼ノ城発掘調査 …… 36
駅南区画整理事業に伴う発掘調査 …… 37
共同住宅建設に伴う発掘調査 …… 39
テクノパーク総社拡張に伴う発掘調査 …… 43

4．史跡整備事業の概要

鬼城山環境整備事業 …… 45

5．付　　載

新谷武夫氏採集の瓦について …… 49

図　目　次

第１図　位置図
第２図　立会・試掘・確認・発掘調査位置図：
高梁川以西（Ｓ＝1/40,000）…… 5
第３図　立会・試掘・確認・発掘調査位置図：
高梁川以東（Ｓ＝1/40,000）…… 6
共同住宅建設に伴う試掘調査
第４図　調査地および周辺調査例位置図
（Ｓ＝1/6,000）…… 7
第５図　遺構平・断面図（S=1/80）…… 8
中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査１
第６図　調査地および周辺調査例位置図
（Ｓ＝1/6,000）…… 11
第７図　土層模式図（Ｓ＝1/50）…… 12
中央地区マンション建設に伴う試掘調査１
第８図　調査地および周辺調査例位置図
（Ｓ＝1/6,000）…… 13
第９図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/1,000）および
土層模式図（Ｓ＝1/50）…… 14
三輪地区マンション建設に伴う試掘調査
第10図　調査地および周辺調査例位置図
（Ｓ＝1/6,000）…… 15
第11図　土層模式図（Ｓ＝1/50）…… 16
中央地区共同住宅建設に伴う立会調査
第12図　調査地位地図（Ｓ＝1/6,000）…… 17
中央地区マンション建設に伴う試掘調査２
第13図　調査地および周辺調査例位置図
（Ｓ＝1/6,000）…… 18
第14図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/1,000）および
土層模式図（Ｓ＝1/50）…… 19
土取り事業に伴う分布調査
第15図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）…… 20
共同住宅建設に伴う立会調査
第16図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）…… 21
携帯電話中継局設置に伴う試掘調査
第17図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）…… 22
農地改変による土取り工事に伴う立会調査
第18図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）…… 23
共同住宅建設に伴う試掘調査
第19図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）…… 24
県営ほ場整備事業（原地区）に伴う試掘調査
第20図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）…… 25
中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査２
第21図　調査地および周辺調査例位置図
（Ｓ=1/6,000）…… 27
第22図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/1,000）および
土層模式図（Ｓ＝1/50）…… 28
病院建設に伴う試掘調査
第23図　調査地位置図（Ｓ＝1/4,000）…… 29
第24図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/150）…… 30
第25図　Ｔ１～３土層断面図（Ｓ＝1/60）…… 30
東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）
第26図　調査地位置図（Ｓ＝1/4,000）…… 31
第27図　三須・中所遺跡３区遺構配置図
（Ｓ＝1/300）…… 32
東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査
第28図　調査地位置図（Ｓ＝1/4,000）…… 33
第29図　Ｔ－２・Ｔ－３土層断面柱状図
（Ｓ＝1/40）…… 34
第30図　裏壁遺跡出之向地区遺構配置図 …… 34
第31図　井手・袋ノ内遺跡遺構配置図
（Ｓ＝1/400）…… 35
駅南区画整理事業に伴う発掘調査
第32図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）…… 37
第33図　上三本松遺跡平面図（Ｓ＝1/100）…… 38
共同住宅建設に伴う発掘調査
第34図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）…… 39
第35図　遺構配置図（Ｓ＝1/100）…… 40
テクノパーク総社拡張に伴う発掘調査
第36図　調査地位置図（Ｓ＝1/10,000）…… 43
第37図　遺構配置図（Ｓ＝1/200）…… 44
鬼城山環境整備事業
第38図　平成13（2001）年度整備事業 …… 47
新谷武夫氏採集の瓦について
第39図　採集地点位置図（Ｓ＝1/20,000）…… 49
第40図　Ａ・Ａ'地点採集の瓦＜1＞（Ｓ＝1/4）…… 50
第41図　Ａ・Ａ'地点採集の瓦＜2＞（Ｓ＝1/6）…… 51
第42図　Ａ－Ａ'地点採集の瓦＜3＞（Ｓ＝1/4）…… 52
第43図　Ａ－Ａ'地点採集の瓦＜4＞（Ｓ＝1/6）…… 52
第44図　Ｂ地点採集の瓦（Ｓ＝1/4）…… 53
第45図　Ｃ地点採集の瓦（Ｓ＝1/4）…… 54
第46図　Ｄ地点採集の瓦（Ｓ＝1/4）…… 54
第47図　Ｅ地点採集の瓦（Ｓ＝1/4）…… 55

図 版 目 次

2001年度埋蔵文化財行政の概要
第1図版　講演会「よみがえる鬼ノ城」…… 2
第2図版　「よみがえる鬼ノ城」展示会場 …… 2
共同住宅建設に伴う試掘調査
第3図版　調査状況 …… 9
第4図版　土壙2 …… 9
第5図版　土壙3・溝4・ピット4 …… 9
第6図版　出土遺物 …… 10
中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査1
第7図版　西トレンチ …… 12
第8図版　出土遺物 …… 12
中央地区マンション建設に伴う試掘調査1
第9図版　土層断面（T－1）…… 14
第10図版　出土遺物 …… 14
三輪地区マンション建設に伴う試掘調査
第11図版　トレンチ土層断面 …… 16
中央地区共同住宅建設に伴う立会調査
第12図版　土層堆積状況 …… 17
中央地区マンション建設に伴う試掘調査2
第13図版　土層断面（T－2）…… 19
携帯電話中継局設置に伴う試掘調査
第14図版　調査地近景 …… 22
第15図版　調査地遠景 …… 22
農地改変による土取り工事に伴う立会調査
第16図版　工事状況 …… 23
共同住宅建設に伴う試掘調査
第17図版　調査地全景 …… 24
第18図版　土層断面 …… 24
県営ほ場整備事業（原地区）に伴う試掘調査
第19図版　C4礫層 …… 26
第20図版　C2旧水田層 …… 26
中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査2
第21図版　出土遺物 …… 28
病院建設に伴う試掘調査
第22図版　T－1土層断面（北から）…… 30
第23図版　調査区に北接する東総社中原本線
南側溝土層断面（西南から）…… 30
東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）
第24図版　三須・中所遺跡2b区古代～中世の
遺構（南西から）…… 32
第25図版　三須・中所遺跡2b区弥生～古墳時代の
遺構（東から）…… 32
東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査
（富江・延地区）
第26図版　井手・袋ノ内遺跡土壙遺物出土状況
（東から）…… 35
第27図版　井手・袋ノ内遺跡東区北半
完掘状況（西南から）…… 35
駅南区画整理事業に伴う発掘調査
第28図版　石原遺跡全景 …… 38
第29図版　上三本松遺跡全景 …… 38
第30図版　鷹尾手遺跡Ⅰ区全景 …… 38
第31図版　鷹尾手遺跡Ⅱ区全景 …… 38
共同住宅建設に伴う発掘調査
第32図版　遺構検出状況 …… 41
第33図版　弥生大溝 …… 41
第34図版　竪穴住居 …… 41
鬼城山環境整備事業
第35図版　新設園路 …… 45
第36図版　学習広場 …… 45
第37図版　列石・敷石転落防止木柵 …… 46
第38図版　石材引き上げ …… 46

表 目 次

表1　2001年度立会・試掘・確認調査一覧 …… 3
表2　発掘調査一覧 …… 4

１．総社市埋蔵文化財行政の概要

平成13（2001）年度文化財行政の概要

本市における文化財行政は，教育委員会文化課文化財係が担当しており，埋蔵文化財をはじめとした文化財一般の調査・保護・啓発を主たる執務としている。

＜組織＞

教育長	楽田　交三		主　事	松尾　洋平　（調査担当）
教育次長	大村　　稔		臨時職員	浅沼紀代美（～2001年６月）
文化課長	加藤　信二		臨時職員	櫻本実佐子（2001年７月～12月）
文化財係長	谷山　雅彦（調整担当）		臨時職員	福田有美子（2002年１月～）
主　任	平井　典子（調査担当）			
主　任	武田　恭彰（調査担当）		［埋蔵文化財学習の館］	
主　任	前角　和夫（調査担当）		館　長	村上　幸雄
主　事	高橋　進一（調査担当）		臨時職員	近藤　雅子
主　事	笹田　健一（庶務・文献担当）		臨時職員	田中　富子

埋蔵文化財

長引く景気の低迷によって，今年度は大規模な民間開発はなく，個人病院建設，工場の拡張，マンション・共同住宅の建設等小規模な事業が実施されたにすぎない。このうち試掘・立会調査等から発掘調査の対象となったものは，共同住宅建設と工場拡張によるわずか２件であった。この外は，掘削が客土中で収まるものや，遺構・遺物の存在しない箇所が多く，遺跡が大きく破壊されることは免れた。なお，個人住宅については，発掘担当職員の不足等から対応ができていないが，発掘調査が減少していることから，今後個人住宅にもなんらかの対応をしていきたい。

公共事業においても，新たに原地区ほ場事業が実施されることとなった外は，駅南区画整理事業，東総社中原本線改良事業，山田地区ほ場整備事業など前年度以前からの継続事業に伴う調査である。なお，原地区においては試掘調査を実施したが，今年度工事予定地では遺構・遺物は確認されなかった。

この外，史跡整備事業に伴う鬼城山の発掘調査は，西門から第２水門までの城郭線，および北門の調査を実施し，特に北門の調査では門の構造や排水溝の存在が明らかになった。

文化財保護・啓発

1994年から史跡整備にむけ発掘調査を実施してきた鬼城山の整備については５月17日，10月11日に整備委員会を開催し，委員及び文化庁・県教育委員会等のオブザーバーからご指導いただき，今年度より国・県の補助金の交付によって，本格的な整備に着手することとなった。

おりしも，今年度は文化センター市民ギャラリーがリニューアルされることから，オープン記念として，文化課文化振興係とともに「よみがえる鬼ノ城」と銘うって，７月28日～８月12日までの２週間，鬼城山関連の写真・遺物・模型の展示会，土・日のスライド会を開催した。また，整備に向けて，より一層の市民の理解を得るため，長年鬼城山の調査に携わってきた総社市埋蔵文化財学習の館館長村上幸雄氏に依頼し，講演会を実施した。調査の成果と意義について映像を交えて語っていただき，

8月12日というお盆の頃にもかかわらず，市内外から500人近い参加を得，鬼城山に対する関心の高さがうかがえた。

今年度における鬼城山の整備は，駐車場から角楼へ向かう最初の難関である急勾配の坂道の横に，バリアフリーの観点から勾配を緩やかにした遊歩道を新設した。また角楼や西門が一望できる学習広場を設置した。

第１図版　講演会「よみがえる鬼ノ城」

その外，例年どおり作山古墳，鬼城山，宮山古墳群，江崎古墳，秦原廃寺，栢寺廃寺の下刈り・清掃を実施し，史跡の保護と活用を目指した。

また，県指定石造美術岩屋皇の墓，県指定史跡宮山墳墓群，市指定天然記念物いぶき・草田八幡宮の社叢の標柱，市指定史跡義民埋葬地の説明板を設置し利用者の利便を図った。

第２図版　「よみがえる鬼ノ城」展示会場

数年来実施している岡山県立大学学生を対象とした博物館実習では，鬼城山の遺跡見学，埋蔵文化財学習の館において総社市およびその周辺の歴史についての講義・ガラス玉作りなどを行った。

今年度は，阿曽小学校の依頼を受け，初めての試みとして６年生約30人が，真壁遺跡出之向地区の発掘に参加した。数時間ではあったがこども達は，溝や土壙を掘り，小片ではあっても土器を手にして目を輝かせていた。体制が整っていないため問題点も多々あるが，こういった機会も増やしていきたい。

資料の貸し出しについては，出版社等からの写真資料の依頼が多かったが，展示遺物については以下のとおりである。

・島根県安来市和鋼博物館　　平成13年度春季特別展「塩津山１号墳とその時代」
　宮山遺跡出土特殊器台レプリカ
・徳島市立考古資料館　　特別企画展「五世紀の武装－王者と武人」
　随庵古墳出土短甲，冑，頚甲，位至三公鏡，勾玉，ガラス小玉
・岡山県立博物館　　平成13年度特別展「王墓を彩る～特殊器台の系譜～」
　柳坪遺跡出土特殊器台，山津田遺跡出土特殊器台・壺片，宮山遺跡出土器台片

以上，文化財行政の概要を記したが，発掘調査は減少傾向にあり，今後滞っている報告書の作成や，文化財の保護・啓発に力点をおいていく必要がある。　（平井）

表1　平成13（2001）年度立会・試掘・確認調査一覧

番号	所在地	調査原因等	種別	調査期間	調査所見	報告頁
1	真継2109	共同住宅建設	試掘	4/3・4	遺構・遺物あり	7
2	中央6-1-119・120	共同住宅建設	試掘	4/12	遺構・遺物あり	11
3	中尾1102-1外	県営ほ場整備事業	試掘	4/17	水田層のみ　遺物少量あり	－
4	中央4-16-104	マンション建設	試掘 立会	5/1 6/7	包含層あり　遺物少量あり	13
5	三輪834-1，831-1外	マンション建設	試掘	5/9	遺構なし　遺物１点のみ	15
6	中央2-230-1	共同住宅建設	立会	6/4	遺構・遺物なし	17
7	中央5-4-106・107	マンション建設	立会	6/7	遺構なし　遺物小片僅少	18
8	久米711外	土取り事業	分布	8/3	現況では古墳の確認できず	20
9	小寺1967	共同住宅建設	立会	8/9	杭打工法のため不明	21
10	三須1674	携帯電話中継局設置	試掘	9/5	遺構・遺物なし	22
11	上林642-1外	農地改変による土取り	立会	9/5	遺構・遺物なし	23
12	三輪792-1	共同住宅建設	試掘	9/21	遺構・遺物なし　氾濫原	24
13	中尾909外	県営ほ場整備事業	試掘	10/3	遺構・遺物なし	25
14	中央6-12-108	共同住宅建設	試掘	11/9	遺構なし　遺物僅少	27
15	三須	病院建設	試掘 立会	12/5 2/12	遺構・遺物なし	29
16	山田	県営ほ場整備事業	確認	3/20～	遺構・遺物あり	－

表2　発掘調査一覧

	遺　跡　名	調　査　原　因	頁
A	砂子遺跡5区	県営ほ場整備事業	−
B	中所遺跡2区・3区	道路改良事業（三須地区）	31
C	真壁遺跡出之向地区， 井手・袋ノ内遺跡	道路改良事業（富江・延地区）	33
D	鬼城山	史跡整備事業	36
E	石原遺跡1区・2区・3区， 鷹尾手遺跡1区・2区， 上三本松遺跡	区画整理事業	37
F	諸上遺跡	共同住宅建設	39
G	小造山西古墳群	工場拡張	43

第２図　立会・試掘・確認・発掘調査位置図：高梁川以西（Ｓ＝1/40,000）

高梁川
東横山
横山
北溝手
南溝手
下林
三田
三田
西田
岡谷
鶴片山
正法寺
福井
福井
荒神
荒神
荒神

2．立会・試掘・確認調査の概要

共同住宅建設に伴う試掘調査

遺 跡 名　荒神ヶ市遺跡

所 在 地　総社市真壁2109番地

調査期間　平成13（2001）年４月３・４日

調査概要

（調査経緯）

調査は，共同住宅の建築確認申請にともなう事前審査で実施したものである。当初，立会調査の対応であったが，地盤改良が予定されていたことから試掘調査として実施した。

調査地は，市内中心市街地の南端に近接しており，現在，駅南地区土地区画整理事業の進められている範囲内にあたる。西には高梁川が南流するが，かつてはいく筋もの支流が市街地に流れ込み，その痕跡を旧河道としてうかがうことができる。そのうちの一つが調査地の西側から南側にかけて認められる。

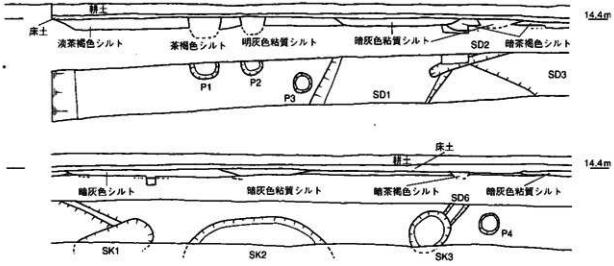
周辺での調査例は，高層建造物等少なからず存在するものの個人住宅や耕作地もまだ多く残されているため，開発もやや少なく，調査地の南約80mと東南約100m，東約150mの３地点で立会調査が，東南約115～225mで区画道路にともなう発掘調査が実施されているのみである[1]。

南約80mの立会調査地点では，調査地の大半が礫層で，南端部において溝状の落ち込みが検出されたのみ。しかし多量の遺物（須恵器・土師器・弥生土器）が出土しており，しかも小破片でなく，完形もしくはそれに近いものが多く含まれているようである。東南約100mの立会調査地点でも砂質土～砂礫層となるが，この地点からの遺構・遺物の検出・出土は認められない。東約150mの立会調査地点ではわずかな遺物とピット状遺構が検出され，遺構面となる淡茶褐色系土層も認められている。

第４図　調査地および周辺調査例位置図（Ｓ＝1/6,000）

また，発掘調査では，御野城遺跡として６世紀代の住居が10軒あまり確認されている。

このような状況から，本調査地が確実に遺跡内であるとの断定はできないものの，南約80mの立会調査地点の調査結果からみても，本調査地の方向に遺跡が所在する可能性は非常に高いものと判断された。また，旧河道の復元からは調査地が砂礫層に近いかその内縁にあたるものと予測された。さらに工事掘削が設計GLマイナス１m（表土下約50cm）の地盤改良を実施する計画であったことから，立会調査の対応を急拠遺跡の有無を確認するための試掘調査として，工事に先立ち実施をした次第である。



第５図　遺構平・断面図（S＝1/80）

（遺構・遺物）

調査は，重機を用いてのトレンチ調査で，予想どおり砂礫層にならなかったことから遺構が存在していた。

基本層位は耕作土の下に床土，そして遺構面となる淡黄褐色シルト層となるが，東に向かって遺構面は下降し，床土との間に暗褐色シルト層が堆積してくる。この面においても遺構が検出されている。

検出された遺構は，溝４・土坑３・ピット４である。トレンチ幅が１mであることから遺構全体のわかるものは少ない。

溝１　　層位の確認を重視したため，断面での検出である。南北方向でわずか西にふってのびる溝。断面から幅2.2m，底幅2.0m，深さ18cmを測る（底高14.22m）。埋土は明灰色粘質シルト。

溝２　　東西方向でわずか南にふってのびる溝。溝１と一部重複しており，埋土も同じ明灰色粘質シルトであることから，溝１の枝溝と考えられる。検出幅0.2mであるが，断面より幅0.35m，底幅0.1m，深さ18cmに復元される（底高14.22m）。

溝３　　北西から南東方向に走る溝。溝１・２と土坑１，暗褐色シルト層に削られており，復元幅1.5m，底幅1.15m，深さ25cmを測る（底高14.15m）。埋土は暗茶褐色シルト。

溝４　　北東から南西方向に走る溝。土坑３に削られている。復元幅0.35m，底幅0.8m，深さ15cmを測る（底高14.21m）。埋土は暗茶褐色シルト。

土坑１　　溝３を削り込んで，トレンチの南に広がっている。長方形の土坑で長軸（1.7）・短軸（0.72）m前後になろうか（底高未掘）。埋土は明灰色粘質シルト。

土坑２　　暗茶褐色混じりの暗褐色シルトの落ち込みとして検出した。トレンチ南側に広がっており，

第３図版　調査状況

第４図版　土坑２

第５図版　土坑３・溝４・ピット４

復元すると3.4m前後の円形土坑となる。検出は，1/5ほどである。深さは15cmを測る（底高14.07m）。

土坑３　短軸0.8m，長軸（1.0）mの楕円形を呈する。溝４を削り込んでいる。深さ35cm（底高13.93m）。埋土は暗褐色シルト混じりの明灰色粘質シルト。

ピット１　トレンチの一番西側で検出された。1/2が北側トレンチ外となるが，径68cmの円形に復元される。底径，深さともに45cmを測る（底高13.98m）。埋土は黄褐色シルト。

ピット２　ピット１同様に，1/2の検出であるが，径45cmの円形に復元される。底径26cm，深さ38cm（底高14.05m）。埋土は暗茶褐色シルト。

ピット３　直径40cm，底径28cm，深さ20cmを測る（底高14.02m）。遺構面を大きく削り込んでの検出であることから，１割程度径が大きくなる。埋土は暗茶褐色シルト。

ピット４　トレンチの一番東側で検出された。直径44cm，底径35cm，深さ20cmを測る（底高14.09m）。埋土は暗茶褐色粘質シルト。

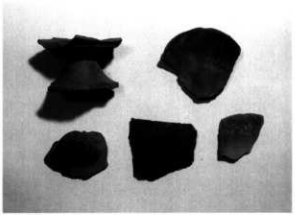
落ち込み状遺構　トレンチの東部分で認められる暗褐色シルトの遺構面で２ケ所，明灰色粘質シルトの落ち込み状堆積として検出された。西側のそれは，断面で幅２m，底幅１m・深さ15cm（底高14.25m）となり，南側が土坑２で削られているが，溝あるいは土坑になろうか。東側のそれは，幅4.6m，深さ10cm（底高14.28m）で南北方向に広がっており，後世の耕作等によって周囲を削り取られたその残りの低地部分（たわみ）と推測される。

出土した遺物は，ピット３・４から弥生土器と土師器，溝３から土師器・須恵器，土坑２から須恵器，暗褐色シルト層内から弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器である。土坑２の須恵器と暗褐色シルト層の土師質土器以外はいずれも細～微片である。

１は土坑２から出土した須恵器の高杯である。口縁部を欠くため，脚径約９cmを測るほかは数値の計測ができない。脚端部は上方に引き延ばしてのちに外下方につまみだしている。２は鍋の把手。３は須恵器の甕片。４は暗褐色シルトから出土した小椀で，口径4.9cm，高さ2.7cmを測り，底がやや凹むもの。５も４と同じく小椀。

（まとめ）

今回の調査は，建築確認申請の事前審査で，共同住宅建築のために地盤改良が予定されていたことから緊急に行った試掘調査である。工事施工までの期間がほとんどなかったことから，十分な試掘調査であったとはいえないが，遺構の検出が認められたことから遺跡地内となり，その保存に関する協議が行われ，まず地盤改良レベルをあげることを考えたが保護層を確保することが不可能であったことから，杭打ち工法への変更処置をとった。この工法変更は施工業者が地盤改良・杭打ちの２工法で検討してきたこともあり，事業者の多大な御協力を頂くことで可能となったものである。



第６図版　出土遺物

今回の調査結果からは，遺跡の中心が調査地の東側に広がるもの思われる。西にある旧河道に沿って一定範囲に礫層が存在し，その東側には後背地として淡黄褐色シルト層が東にわずか下降しながら，さらにトレンチの東部に認められた暗褐色シルト層がその上部に堆積する。さらに遺構の埋土に明灰色系が多いことからかつては中世の堆積土層が存在していたものとも推測される。北側での調査例が少ないことから，遺跡の範囲はきめがたいが，旧河道に沿って北西から南西に細長く分布するものと推測される。

遺跡の時期は，遺物から弥生～中世である。埋土からは黄褐色シルトが弥生，暗茶褐色シルトが古墳，明灰色粘質シルトと暗褐色シルトが中世となる。

また，西と南に認められる旧河道は，区画道路の発掘調査からみて６世紀代の集落が部分的にこの河道推定地内にも営まれていることから，順次集落として利用されていったものと推測できる。この段階にはかなり旧河道がせばまっていたこととなり，今後の事前審査において旧河道内でも中心部以外は調査対象とする必要があり，注意を要する。（前角和夫）

註　谷山雅彦「勤労者総合福祉センター建設に伴う確認調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報』１　1991年11月）

「表１　立会・確認調査一覧表」の番号１（『総社市埋蔵文化財調査年報』４　1994年11月）

平井典子・高橋進一「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報』９　1999年12月）

「表１　立会・確認調査一覧表」の番号12（『総社市埋蔵文化財調査年報』９　1999年12月）一覧表では調査所見を砂層とし，遺物・遺構・遺跡をいずれも×としているが，新規発見遺跡（荒神ヶ市東遺跡）で△・×・△と本報告で訂正する。

中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査１

遺 跡 名　石原散布地

所 在 地　総社市中央６－１－119・120

調査期間　平成13（2001）年４月12日

調査面積　２㎡（開発面積1,361.45㎡）

調査概要

（調査経緯）

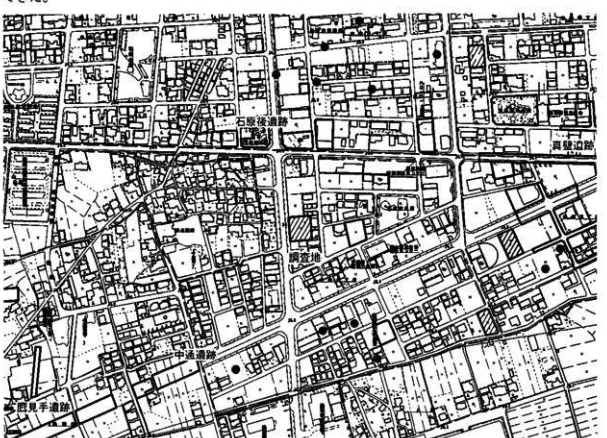
調査は，共同住宅の開発行為許可申請にともなう事前審査で実施したものである。

調査地は，市街地の南部地域，市役所から南へ約500m，文化筋通りの東側に接している。

周辺での調査例は，調査地の北側において発掘・試掘・確認・立会の各調査が集中し，西側では石原集落で民家が密集，東～南側では住宅地化が著しいものの個人住宅を主体とするため調査の実施までには至っていない状況である。

隣接地の調査例がないことから本調査地を確実に遺跡地内と断定することはできないが，西の石原集落が調査地よりさらに１段高い地形であり，遺物の散布も認められることから包蔵地（石原散布地）として認識をし，その縁辺部にあたるものと判断した。

工事の地盤改良は，盛土と耕作土内とに収まるが，石原散布地周囲の状況を知る上で重要と判断したことから試掘調査を実施する方向で協議を行い，事業者の理解を得ることができ，試掘調査が実施できた。



第６図　調査地および周辺調査例位置図（Ｓ＝1/6,000）

（遺構・遺物）

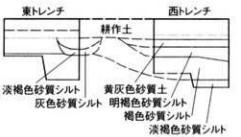
調査は，現況が休耕田であったことから，手掘でトレンチを２ケ所に設定した。

基本層位は，耕作土の下に褐色砂質シルトと淡褐色砂質シルトとなる西トレンチと，その褐色砂質シルトが大きく下降して耕作土との間に黄灰色砂質土と明灰褐色砂質シルトの２層が堆積する東トレンチと，その状況は明らかに異なっている。遺構面は，褐色砂質シルト層の上面で，東トレンチの２層を包含層とし，同様に西トレンチにもかつて包含層が存在したが後世の削平を受け消失したものと推測した。

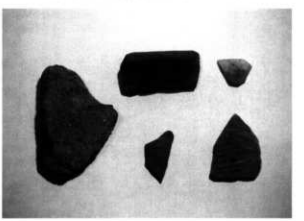
検出された遺構は，西トレンチで溝状の落ち込み，東トレンチで一段低くなる地形の落ちのみである。溝状の落ち込みは，断面に一部かかったのみであることからその規模は不明。埋土は下層が褐色砂質シルト，上層が淡褐色砂質シルトと，包含層を含まないことから遺構面より掘り込まれた遺構で，後世の包含層削平以後の遺構と判断したが，出土遺物もなく明確な時期は不明である。

東トレンチの落ちは，現況で落差約25cmである。ここでの褐色砂質シルト層の遺構面は淡灰色が強くなり，粘質性も生じ，低湿地状となっている。この落ちの段には２層の土層堆積があり，遺物包含層と判断した。下層を弥生～古代，上層を中世の堆積と考えている。

第７図版　西トレンチ



第７図　土層模式図（Ｓ＝1/50）



第８図版　出土遺物

出土した遺物は，東トレンチの黄灰色砂質土層より瓦・土師器・土師質土器・須恵器であるが，いずれも細片である。

（まとめ）

今回の調査は，開発行為許可申請の事前審査で，共同住宅の建築計画にともなう試掘調査である。工事は地盤改良をともなうが，その深さは盛土と耕作土内に収まるものであった。しかし周囲の状況を把握するため試掘調査を実施した。

調査の結果，西側に地形が高く，耕作土直下で遺構面が検出された。対して東側は遺構面が下降し，その間に遺物包含層の堆積が確認できた。トレンチの規模がごく小さいという制約があるが，遺構・遺物ともにわずかであったことから，さほど密集した遺構は存在しないものと判断した。遺跡の中心は，西に向かうほど地盤が高くなることからも，石原集落部分になると想定している。　（前角）

中央地区マンション建設に伴う試掘調査１

遺 跡 名　真壁遺跡

所 在 地　総社市中央４－16－104

調査期間　平成13（2001）年５月１日（試掘調査），６月７日（立会調査）

調査面積　２㎡（建物219.07/敷地848㎡）

調査概要

（調査経緯）

調査は，共同住宅（マンション）の建築確認申請にともなう事前審査で実施したものである。

調査地は，市街地の東南部，中央土地区画整理事業にともない大規模発掘調査の実施された真壁遺跡の北側に位置する。

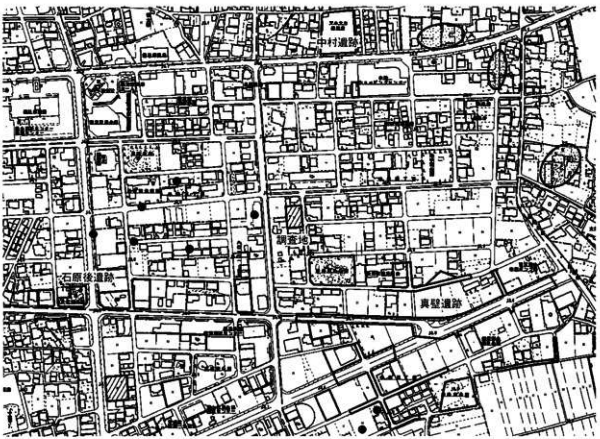
周辺での調査例は，立会調査がほとんどであり，地点により遺跡が確認されたり，確認されなかったりと，遺跡範囲の確定にあたってはかなり困難な地区である[8]。

このような状況の中，３階建ての建築物であり，確実に遺跡地内との断定はできなかったものの，立会調査でなく，事前の試掘調査として実施することとした。

（遺構・遺物）

調査は，現況が休耕田であったことから，手掘によるトレンチを２ケ所で設定した。

基本層位は，Ｔ－１が上から耕作土，客土，淡橙灰色砂質土，淡灰褐色粘質土の順で，Ｔ－２が客土でさらに２層，淡橙灰色砂質土でさらに３層の細分ができた。



第８図　調査地および周辺調査例位置図（Ｓ＝1/6,000）

調査地の北東半分は1段下がった地形となり，そこに落ち込んだ包含層？が確認された。また南西半分は比較的高いレベルにあり，淡橙灰色砂質土の上面が遺構面となる感触をもったが，客土の存在から，すでに地下げを受け遺構面となる基盤層の深い部分が残されたものと推測した。さらに，この1段下がる北東部分の北側には旧河道も推定されており，その縁辺部に相当し，低地可耕部にあたると判断した。南西部での削平を行い，その土により地ならしをしたものであろうか。

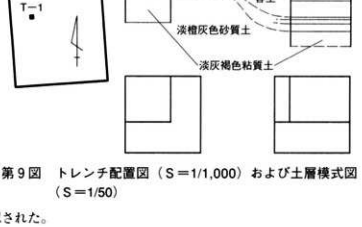
遺物には弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶器・磁器があるが，いずれも少量で，その多くは客土から出土したものである。また遺構も基盤層が削平されているものと思われまったく検出されず，遺跡地との断定はできなかった。また，包含層の存在する北東部分は工事掘削のレベル以下であり，現段階でこれ以上の対応に踏み込むことはできなかった。

第9図版　土層断面（T－1）

第10図版　出土遺物

（まとめ）

調査は，遺跡の存在の有無が困難な地区であり，工事内容も盛土以下への掘削がともなうことから，事前の試掘調査を実施したものである。その結果，北東側に一段低くなる地形が検出され，低地可耕部と判断。また，南西の高い部分は大きく削平を受け，遺跡は消滅したものと推測した。



第9図　トレンチ配置図（S＝1/1,000）および土層模式図（S＝1/50）

なお，地中梁にともなう掘削工事において立会調査を行い，その際，建築範囲の南西端において土器の出土が確認された。

遺物は，弥生土器の壺形土器で，完形とはならないが大型の破片である。すでに工事レベルまで掘削が完了しており遺構の検出はできなかった。が，若干の炭の散布もがみられたので何らかの遺構であった可能性は高い。このことから，試掘調査で遺構面になろうかと推測した淡橙灰色砂質土が確実に遺構面として認識することができ，地下げによる基盤層の深い部分が残されたものでないことから，遺跡は消滅しておらず，南の真壁遺跡につながる遺跡となろうか。（前角）

註　「真壁遺跡」（「総社市史」考古資料編　1987年3月）

松尾洋平「真壁遺跡」の周辺主要遺跡分布図（「総社市埋蔵文化財調査年報」8　1998年11月）

三輪地区マンション建設に伴う試掘調査

遺 跡 名　遺跡なし

所 在 地　総社市三輪834－1，831－1，1773－2

調査期間　平成13（2001）年5月9日

調査面積　1㎡（建物223.95/敷地913.57㎡）

調査概要

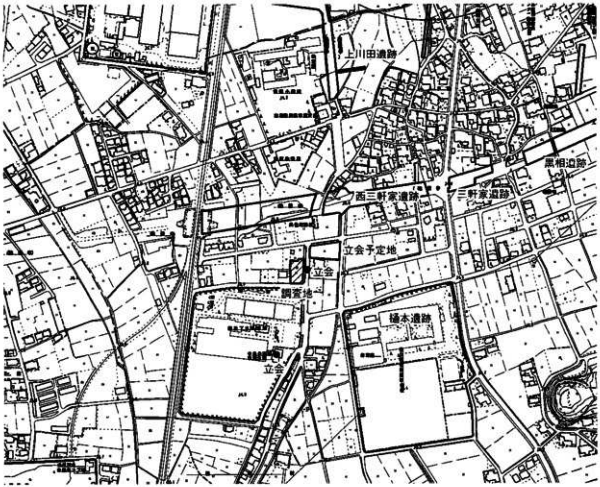
（調査経緯）

調査は，共同住宅（マンション）の建築確認申請にともなう事前審査で実施したものである。

調査地は，総社駅から南へ約1km，清音村との行政境に近いＪＲ伯備線沿いである。

周辺での調査例は，発掘調査が駅南土地区画整理事業による西三軒屋遺跡（北東約185m）と総社南高等学校建設にともなう樋本遺跡（北東約175m），立会調査が下水処理場内（南約135m）と東側道路でそれぞれ実施されたほか，北東約50mの隣接した位置で同事業者・同規模のマンションの立会調査も予定されている[註1]。

これらの調査状況からみると調査地内に遺跡の存在する可能性はきわめて低く，河道に近いか，河道内と推測される。しかし北からのびた中洲状の地形も認められ，現況も畑地でもあったことから，事前に試掘調査を実施することとした。



第10図　調査地および周辺調査例位置図（S＝1/6,000）

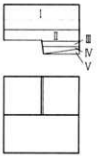
（遺構・遺物）

調査は，１m角のトレンチを１ケ所設定した。

層位は，Ⅰ：耕作土，Ⅱ：橙褐色砂（５cm以下の小石まじり），Ⅲ：暗茶色砂質土，Ⅳ：青灰色砂礫，Ⅴ：暗灰～暗灰褐色砂質土である。Ⅰ～Ⅲ層が水平堆積で，Ⅳ層が西に下降した堆積状況を示し，Ⅴ層には炭化した細枝を含み，かつ腐敗臭もあった。

遺物は，Ⅴ層から土師器と思われる微片が１点である。やや摩滅している。

当初もう１カ所のトレンチを予定していたが上記の状況と同様と判断し行わなかった。



第11図
土層模式図（S＝1/50）

（まとめ）

試掘調査の結果，遺構は検出されず，遺物も古代～中世のものである。土層断面の観察からは，Ⅴ層が旧河道の帯水によるたわみに堆積した沼地状であり，Ⅳ層が河川敷となるような洪水による堆積，さらにⅢ・Ⅱ層もその土質から河道周辺での堆積作用による土層と判断され，この間に水田層の形成はまったく認められなかった。

第11図版　トレンチ土層断面

北からの地形ののびは，中世以降に形成されたかつての高梁川の中洲に相当するものと思われ，調査地での形成はさらに時期が下り，江戸期の絵図に古川筋と記されている旧河道筋の東側肩部に相当することから近世以降と判断している[註2]。

（前角）

註１　平井典子「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報』６　1996年11月）
「表１　立会・確認調査一覧表」の番号20（『総社市埋蔵文化財調査年報』４　1994年11月）
「表２　平成７年度立会確認調査等一覧表」の番号10（『総社市埋蔵文化財調査年報』６　1996年11月）
平成12年度の事前審査で立会調査予定となっているもの。

２　この中洲は北に大きく広がっており，その中心あたりにおいては遺跡の存在が確認されることから，中心部の地形形成時期は大きく遡るものとみられている。
平井典子「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報』８　1998年11月）

中央地区共同住宅建設に伴う立会調査

所 在 地　総社市中央２丁目230－１番地

調査期間　平成13（2001）年６月４日

調査概要

調査地は，総社駅より北東へ約400mの地点である。現況は道路面まで盛土された更地で，それ以前は休耕田。

周辺での調査例は，調査地の北西約100mの総社西中学校敷地内で確認調査が実施されているのみ。また，調査地の北側一帯はゴウラ（＝河原？）と通称され，礫の非常に多い土地といわれている。

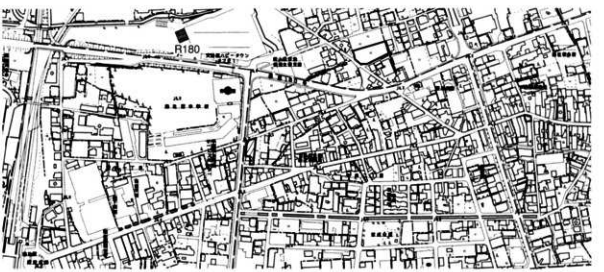
工事は３階建ての共同住宅で，杭打と地中梁の掘削がともなう。地中梁の掘削は設計GL－1400mm。

この建築確認申請にともなう事前審査は，周囲の調査事例が少なく，遺跡の有無を判断できる状況になかったことから試掘調査を実施すべきではあったが，すでに盛土されており，また本調査地が総社西中学校の確認調査地から南東方向になり，市街地内の地形復元からみて同様の状況と判断，河川敷との予測をしたことから，試掘調査でなく工事段階での立会調査として実施した次第である。

調査の結果，遺構，遺物ともに検出されなかった。

基本層位は，約80cmの盛土とその下に約20cmの黒褐色粘質シルト層，さらに褐色～茶褐色のシルト～砂礫層の順である。黒褐色粘質シルト層を盛土される直前までの水田耕作土と推測したが，かなりのグライ化と腐植化を生じている。また褐色～茶褐色のシルト～砂礫層には部分的に上層の水田耕作土の影響によるマンガン系の沈殿をシルト層中に認めることができるが，主体は10cmほどの円礫を含む砂層である。　（前角）

第12図版　土層堆積状況



第12図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）

中央地区マンション建設にともなう試掘調査２

遺 跡 名　遺跡なし

所 在 地　総社市中央５－４－106・107

調査期間　平成13（2001）年６月７日

調査面積　２㎡（建物223.95/敷地1089.62㎡）

調査概要

（調査経緯）

調査は，共同住宅（マンション）の開発許可申請にともなう事前審査で実施したものである。

調査地は，市街地の南東部に位置し，都市計画４車線道路（会議所通り）の南側に接している。

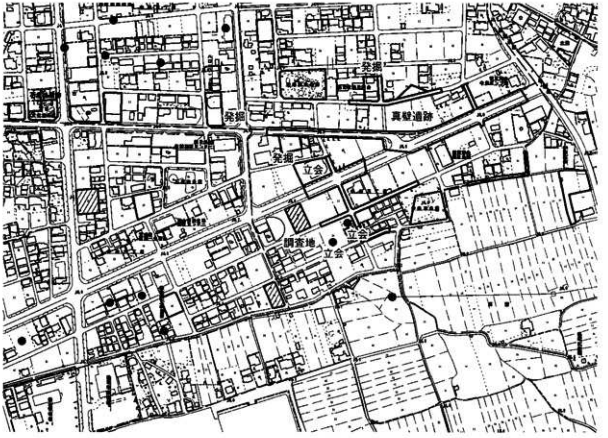
周辺での調査例は，半径100m以内で立会調査が３ケ所と，先の都市計画道路敷設にともなう真壁遺跡の発掘調査がある[註1]。同250mに範囲を広げても真壁遺跡内で３ケ所の発掘調査[註2]が実施されたほかは，いずれも立会調査である。

真壁遺跡の発掘調査結果からは，本調査地の東側に中世の館と推測される方形状の区画溝があるものの，立会調査の結果を加味すると真壁集落の広がりは調査地の北側になるという状況である。

（遺構・遺物）

調査は，現況が休耕田であったことから，手掘で２ケ所のトレンチを設定した。

基本層位は，表土・床土，Ⅲ：淡褐色粘質土，Ⅳ：淡褐色砂質土の順である。途中湧水があるなど，土層からみて安定した地盤にはならないものと判断された。



第13図　調査地および周辺調査例位置図（Ｓ＝1/6,000）

遺構は検出されなかった。

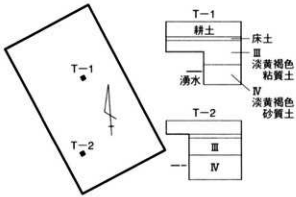
遺物もT－１のⅢ層中より弥生土器・土師器・土師質土器が出土したが，いずれも微片で，かつ摩滅が認められる。

（まとめ）

今回の調査は，昭和55（1980）～昭和57（1982）年に実施された真壁遺跡のすぐ西側に位置していることから事前の試掘調査を行ったものである。その結果，遺構はなく，遺物も流れ込みととらえられるわずかな量で，また土層も土色がうすく，粘土質と安定したものでないことから，遺跡周辺の低地部に相当するものと判断した。湧水のため，表土下80cm以下に掘り下げることができなかったので，これ以下に水田層が存在している可能性もないとはいえない。工事は道路との高低差があることから，杭をのぞく掘削部分はすべて盛土内に収まるものである。

今回の調査では遺構が検出されなかったものの，開発許可申請にともなう事前協議で，建築確認申請にともなう協議に比べて工事開始までの時間的猶予がある。この点で仮に遺跡が発見され，その保存協議の結果，発掘調査となったとしても時間的な確保ができうる。今後においては，建築確認申請の合議以前に埋蔵文化財の協議がなされるよう，何らかの方策が必要になるものと思われる。

第13図版　土層断面（T＝2）



第14図　トレンチ配置図（S＝1/1,000）
および土層模式図（S＝1/50）

（前角）

註１　「第１表　確認・立会調査一覧表」の番号12（『総社市埋蔵文化財調査年報』２　1993年３月）
「表１　立会確認調査一覧表」の番号２・18（『総社市埋蔵文化財調査年報』３　1994年３月）
「真壁遺跡」（『総社市史』考古資料編　1987年３月）

註２　倉敷中央公共職業安定所総社出張所建設にともなう発掘調査
前角和夫「真壁遺跡（中央４丁目地点）の調査概要報告」（『総社市埋蔵文化財調査年報』９　1999年12月）
松尾洋平「真壁遺跡」（『総社市埋蔵文化財調査年報』８　1998年11月）

土取り事業に伴う分布調査

所 在 地　総社市久米711番地ほか

調査期間　平成13（2001）年８月３日

調査概要

調査地は，総社平野の北端，南に細長く張り出した小丘陵の先端部である。この丘陵の大部分は古くにゴルフ場となっており，丘陵尾根線上の古墳群の大半が消滅している[註]。計画地の周辺では，古墳３基の所在が知られ，うち１基は計画地の北端部に位置するとされるが，今回その所在を確認することはできなかった。

事業計画は個人の土砂採取によるものである。事業者による事前の遺跡確認調査を依頼され，まず現況において分布調査の実施，その結果をふまえ伐採後には試掘調査の検討が必要となるとの協議を行っている。

現況は雑木林と竹林で，とくに竹林による地形の改変が大きく行われており，裾部に予想される横穴石室墳はまったく確認できなかった。計画地の北に位置する周知古墳１基についても，北に向かうほど丘陵の傾斜がきつくなり，古墳を築くような地形にならないことから，計画地内に所在する可能性があったものの分布調査ではその位置を確認することができなかった。また丘陵裾部の畠地から遺物の採集もまったくなかった。

この結果，遺跡の存在する可能性は非常に低いと判断したが，伐採後には試掘調査を実施する旨で調査結果の回答を行っているが，その後，事業の進展はなく現状のままの様である。　（前角）

註　葛原克人「総社市久米古墳群とその周辺」（『岡山県埋蔵文化財報告』1971年３月）

第15図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）

共同住宅建設に伴う立会調査

所 在 地　総社市小寺1967番地

調査期間　平成13（2001）年８月９日

調査概要

調査地は，市街地の北部，門田小寺土地区画整理事業地内の南端で，ＪＲ吉備線沿い。

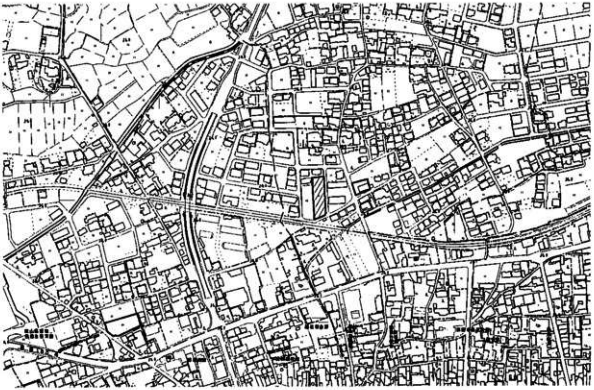
周辺での調査例は，土地区画整理事業にともなう確認調査のほか，事業終了後の共同住宅建築等にともなう調査が多く実施されているが，調査地近隣に限定すると事業施行中の確認調査トレンチが１ケ所と，事業後の立会調査１例があるにすぎない。確認調査時のトレンチ３では，砂層で，その西側に「微高地を想定」し，立会調査では「微高地，遺物有」との調査所見がある。このことから調査地が遺跡地内となる可能性が高い[註]。

工事は建築確認申請にともなう２階建ての共同住宅である。その内容は，ベタ基礎で，掘削も盛土内に収まり，またすでに盛土造成が完了していたこともあって，対応なしとした。しかし遺跡地の可能性が高かったと判断できたことから周囲の状況を把握するという点で事前の試掘調査を実施すべきであったと反省をしている。

その後，杭工法へ変更するとの連絡があり，立会調査として実施をしたが，杭径が細く掘削をともなわない打ち込み工法であったことから地下の状況をうかがうことはできず，遺跡の有無は判断できなかった。（前角）

註　高田明人「門田小寺土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査及び立会調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報』１ 1991年11月）

「表１　立会・確認調査一覧表」の番号９（『総社市埋蔵文化財調査年報』７　1997年９月）



第16図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）

携帯電話中継局設置に伴う試掘調査

所 在 地　総社市三須1674

調査期間　平成13（2001）年9月5日

調査概要

中継局建設予定地は，平成11（1999）年度で実施した岡山県の分布調査においても遺跡の分布がみられなかった地域である。また，計画地の南が既に大きく削られている状況，尾根先端部が平坦地になっていることなどを観察しても遺跡の存在する可能性は低いと考えられた。しかし，計画地が作山古墳に隣接する三須丘陵であることから，事前に小規模な試掘調査を実施した。尾根が平坦になっていることから，かってこの地が開墾されていると予想された。試掘においても地山が浅い位置にあり，平坦に削られた状況が伺えたため，畑などに利用された時期があると考えられる。遺構，遺物などが認められなかったが，工事時にも立会を行い，平面でも遺構が無いことを確認した。　（谷山雅彦）

第14図版　調査地近景

第15図版　調査地遠景

第17図　調査地位置図（S＝1/5,000）

農地改変による土取工事に伴う立会調査

所 在 地　総社市上林642－１番地ほか

調査期間　平成13（2001）年９月５日

調査概要

調査地は，吉備路風土記の丘地内，江崎古墳の所在する小丘陵の東側に位置する。

丘陵は緩やかな地形で，裾部は宅地，中腹はかつての段畠になる。周知遺跡は，西側の江崎古墳のほか，北側の丘陵頂部附近に古墳群の所在が知られている[註]。

事業計画は，広い畑地に改変するための土砂採取。岡山県立吉備路郷土館にこの工事について問い合わせがあり，郷土館より教育委員会にその旨の連絡を受けたことにより，緊急で行った立会調査である。

調査はすでに予定の半分以上の土砂採取が終了した時点であり，残るその法面や掘削土，あるいは伐根や雨水処理溝等による掘削面・掘削土において遺構・遺物の検出・散布がないか確認の作業を行った。その結果，いずれも発見できなかった。

それほど高い丘陵ではないが，その中腹にあたることから，予測される弥生期の集落は北側の頂部周辺か，南側の裾部（現集落内）付近で，調査地点において土地の利用はなされなかったものであろうか。

（前角）

第16図版　工事状況

註　岡山大学学友会内考古学研究部『三須丘陵遺跡分布調査報告』1976年11月

第18図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）

共同住宅建設に伴う試掘調査

所 在 地　総社市三輪字上川原792－１

調査期間　平成13（2001）年９月21日

調査面積　約３㎡

調査概要

（調査経緯）

調査地の近隣では，総社駅南部地域を対象とする区画整理事業に伴う発掘調査が継続して行われており，調査地の南東約50～100mに位置する東総社中原本線建設予定地の発掘調査では，本調査地に隣接する伯備線線路付近から東へ150m程の地点までは砂礫層が広がっており，東へ行くに従って微高地となり，遺構密度が高くなっていくことが判明している。

（調査概要）

調査地は既に造成が完了しており，重機によって試掘壙の掘削を行った。その結果，旧耕作土の下は砂層と旧表土との攪乱層であった。その下層は，礫層を間に含む砂層となっており，遺構・遺物は認められなかった。

（高橋進一）

第17図版　調査地全景

第18図版　土層断面

第19図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）

県営ほ場整備事業（原地区）に伴う試掘調査（第１工区Ｃ区）

遺 跡 名　遺跡なし

所 在 地　中尾911ほか

調査期間　平成13（2001）年（４月17日），10月３日

調査面積　37㎡（工事対象6300㎡）

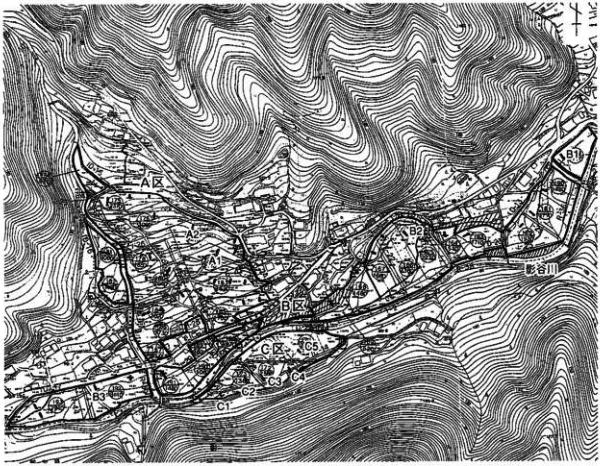
調査概要

（調査経緯）

平成13（2001）年４月17日に実施した試掘調査については，前年度調査の継続事業であったことから年報11に付載として報告をしている[注]。

同年10月３日に実施した試掘調査については，前年度の工区分であるが，今年度の工事発注であり，ここに報告を行う。このほか第２工区において試掘調査を実施しているが，次年度への継続となった地区もあることから次年度で報告をする予定である。

今回の調査地は影谷川の右岸側で，河川敷に非常に近い位置にあたる。山側斜面の傾斜は非常に急で，川に向かって張り出す丘陵部分はまったくない。対岸の北側の地形とはあきらかに異なっており，とくに川面からの比高差の違いは顕著で，調査地においてはほとんどその差は認められない。しかも北向きであり，遺跡の存在する可能性は非常に低かった。しかし，切り土部分については工事に先立ち試掘調査を実施した次第である。



第20図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）

（遺構・遺物）

トレンチは切り土となる部分，５ケ所に設定した。

いずれも基盤層は砂礫層で，床土直下で砂礫層となるＣ１・４・５と，間層の存在するＣ２・３である。前者は影谷川沿いで，比高差もほとんどなく，かつての氾濫原を思わせる。さらに川岸に近いトレンチほど礫が巨大になる傾向が認められる。後者は，川筋がカーブして舌状に張り出す地形となるが，砂礫が基盤層となることからかつての氾濫原が河川の下刻作用により舌状に残された地形と推測される。この地点の現水田は比較的大きな区画となっている。

第19図版　Ｃ４　礫層

遺構は検出されなかったが，Ｃ２・３の土層観察から旧水田層が確認できた。床土と基盤層の間には，上部に現水田へと拡大整理した時の造成土，下部にその造成時の旧水田の床土と，それ以前の堆積土（砂質シルト）が認められている。ほかに，Ｃ４の山側に旧河川の流路跡があった。

第20図版　Ｃ２　旧水田層

遺物は，Ｃ２の周辺，耕土除去後の床土面において近世磁器がわずかに散布していたのみである。くらわんか茶碗系で，かつての農作業にともなって廃棄されたものであろう。

（まとめ）

調査地は，影谷川の右岸の水田地帯。川面との比高差はわずかで，山側斜面の傾斜も著しく急で，かつ張り出し部は認められず，わずかに谷状となる部分に高い石垣で築かれた平坦面がいくつか確認されるのみ。北向きであることからも遺跡の存在する可能性はなかったが，前年度からの継続事業でもあり，試掘調査を実施した。

調査の結果，いずれも砂礫層を基盤層とし，遺構はなく，遺物も近世磁器の散布がわずかに認められたのみ。地形の高い部分で旧水田層を確認したが，いずれも現水田への拡張により畔畦等は除去され検出できず，時期的にも近世・18世紀後半以降になるものと判断した。右岸への進出は，氾濫原として段丘状に残された舌状の張り出し部分を可耕地として最初の利用が始まり，さらに護岸が安定したことにより川岸に近い部分にまで水田を造営していったものと思われる。また，山側に向かっても石垣を築くことによって谷部には水田を，尾根部には畠地を形成している。　（前角）

註　前角和夫「県営ほ場整備事業原地区にともなう発掘調査概要報告」（『総社市埋蔵文化財調査年報』11　2001年９月）

中央地区共同住宅建設に伴う試掘調査２

遺 跡 名　遺跡なし

所 在 地　総社市中央６－12－108

調査期間　平成13（2001）年11月９日

調査面積　2.5㎡（建物138.48/敷地360.79㎡）

調査概要

（調査経緯）

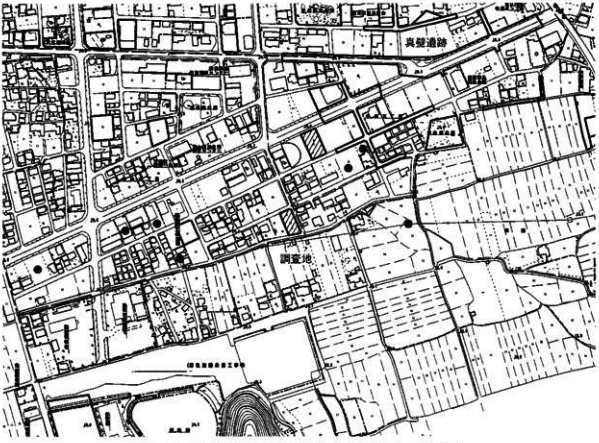
調査は，共同住宅を建築するにあたって事業者による周知遺跡の確認にともなった事前審査である。

調査地は，市街地の南東部に位置し，中央土地区画整理事業にともなう大規模発掘調査の実施された真壁遺跡の南西側に位置している。

周辺での調査例は，住宅地化が著しいものの個人住宅を主に共同住宅が点々とする地区であることから，先の真壁遺跡の発掘調査のほかはいずれも立会調査による対応である。それらの状況から判断すると，真壁集落の範囲は発掘調査地の南西側には広がっていないという状況にある。

本調査は事業計画段階での事前審査であり，事業が実施される場合であれば試掘調査を実施する方向で協議を行った。その結果，事業が進行したことにより，４ヶ月後の11月，稲刈り後に調査を実施することとなった。

調査は，盛土造成工事に並行しての試掘調査で，事業者の重機を借りてトレンチを２ヶ所に設定した。重機の使用にあたっては事業者の協力を得た。



第21図　調査地および周辺調査例位置図（Ｓ＝1/6,000）

（遺構・遺物）

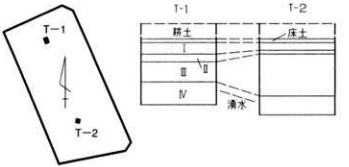
トレンチは，約20cmの耕土を除去した後に重機掘削を行った。約－80cmで湧水が生じ，この間に4層の土層堆積を確認した。耕土・床土，Ⅰ：淡黄灰色砂質シルト，Ⅱ：暗灰～黒灰色砂質土，Ⅲ：淡黄灰色砂質土，Ⅳ：暗茶褐色粘質土の順である。

遺構は検出されなかった。

遺物は，T－2のⅠ層中よりサヌカイト片と砥石？が出土している。

（まとめ）

調査は，周知遺跡の確認にともなうものである。建築確認申請前の審査であることから，周知遺跡でなく，また遺跡の存在する可能性も低かったものの，従来の立会調査でなく試掘調査として実施した次第である。調査の結果，安定した土層ではなく，Ⅱ層とした遺物包含層があるものの，Ⅲ層を遺構面としては認識できないものと判断した。遺物包含層がT－2でその土色を黒から灰色へと変え，遺物の出土もほとんどなく，さらにⅣ層が南に向かって下降していることからも，予想される遺跡は北側であり，その距離も隣接するものではないと考えられる。（前角）



第22図　トレンチ配置図（S＝1/1,000）および土層模式図（S＝1/50）

第21図版　出土遺物

病院建設に伴う試掘調査

所 在 地　総社市三須1342外

調査期間　平成13（2001）年12月５日，平成14（2002）年２月12日

調査面積　約12㎡

調査概要

現在改良工事を行なっている東総社中原本線の路線上に位置する診療所が移転され，東総社中原本線に南接する地に，新たに３階建ての病院が建設されることとなった。

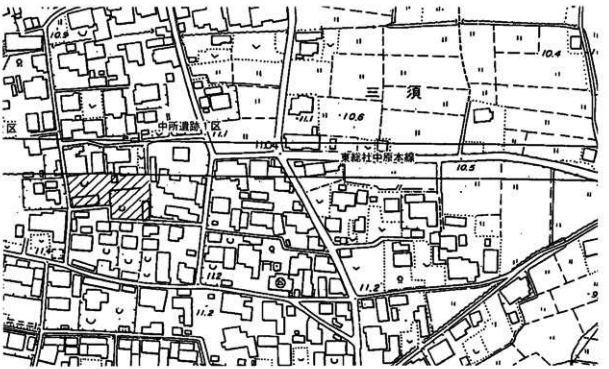
建設予定地の北東と北西には，東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査の結果，遺跡が存在することが確認されている。しかし，北東に位置する中所遺跡１区の南壁付近および南西部には遺構はほとんど検出されず，造成土の直下は砂層あるいは砂礫層となっている。また，北西に位置する中所遺跡２区においても，東壁付近では遺構はほとんど認められない。このことから建設予定地に北接する中所遺跡１区－２区間には，遺構は存在したにしても密度は低いものと考えられた。

また，調査の前日，建設予定地に北接する東総中原本線の南側溝を，病院建設にあわせて構築する必要があったため，側溝部分のみ事前に調査することになったが，ここでも造成土の下層は砂層及び砂礫層となっており，遺構・遺物は確認できなかった。

これらの調査結果から，病院建設予定地には，遺構が存在する可能性は低いものと考えられたが，地中梁が造成土の下層まで及ぶため，試掘調査を実施した。

調査地は現況では駐車場や車の通路となっており，また一部には庭石などが寄せ集められていた。このため掘削箇所が限定され，第26図で示したように３ヵ所のトレンチを設定するにとどまった。

各トレンチはいずれも上層を厚く客土で覆われ，その下層には茶灰褐色土の無遺物層が堆積する。さらに下層は砂礫層となり遺構・遺物は検出されなかった。

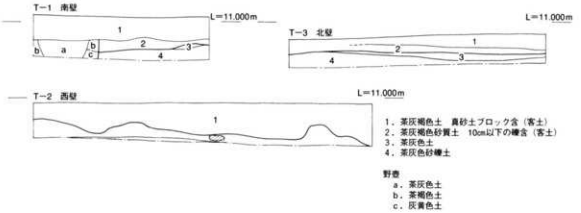


第23図　調査地位置図（S＝1/4,000）

以上から，病院建設予定地には遺構が存在する可能性は非常に低いと考えられたが，試掘箇所が限定されていたため，地中梁掘削時には立会調査を実施することとした。

翌年２月12日，地中梁部分の立会調査を行なったが，ここでも堆積状況は変わらず，遺構・遺物共に確認できなかった。（平井）

第24図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/150）



第25図　Ｔ１～３土層断面図（Ｓ＝1/60）

第22図版　Ｔ－３土層断面（北から）

第23図版　調査区に北接する東総社中原本線南側溝土層断面（西南から）

3．発掘調査の概要

東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）

遺 跡 名	中所遺跡２区	中所遺跡３区
所 在 地	総社市三須1345外	三須1180外
調査期間	平成13（2001）年４月３日～５月10日	平成14（2002）年３月12日～28日
調査面積	約1,500㎡	約300㎡

調査概要

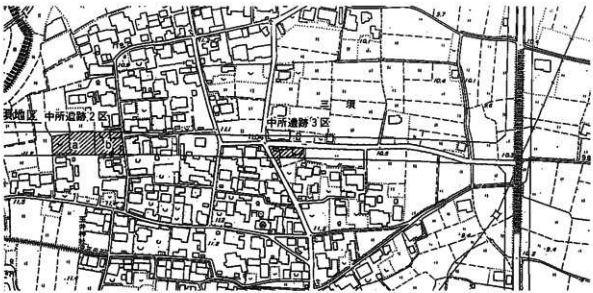
一昨年度からの継続事業である東総社中原本線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は，今年度は工事工程や住居の移転等に伴い，三須地区のみでなく，富江地区，井手地区の調査にも新たに着手することとなった。まず調査中であった中所遺跡２区の発掘調査を引き続き実施し，その後，富江地区：真壁遺跡・出之向地区，延地区：井手袋ノ内遺跡，次いで三須地区：中所遺跡３区と地点を大きく変え調査を実施した。ここでは三須地区の調査状況を以下に記す。

三須・中所遺跡２区

昨年度の調査からの継続であり，今年度は２－ａ区の西半と２－ｂ区を中心に調査した。

２－ａ区西半は，東半と同様に近世以降の攪乱で大きく破壊されていたが，西端付近に弥生時代～中世の土壙，柱穴が若干と，弥生時代後期初頭の溝が確認された。この溝は南北方向に掘削され，検出面で幅約１ｍ，深さ0.8ｍを測る。西側から完形に近い土器が多数投棄されており，調査区の西側にもこの時期の集落が存在することが推測される。

２－ｂ区も，瓦礫を大量に投棄した近世以降の攪乱によって大きく破壊されている。かろうじて破壊を免れた箇所から，２－ａ区同様弥生時代～中世の土壙，柱穴，古墳時代後期の住居址２軒が確認された。遺構は２－ａに比し少なく，東半部は住居が一部かかる程度で，中世以前の遺構はほとんどみられない。



第26図　調査地位置図（Ｓ＝1/4,000）

第24図版　中所遺跡２ｂ区古代～中世の遺構（南西から）

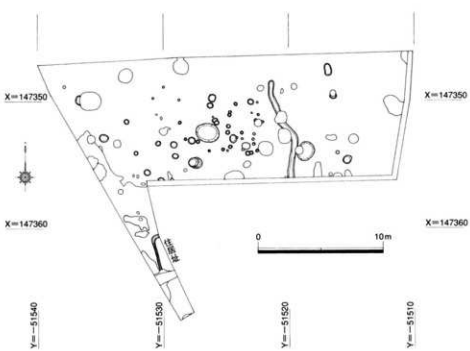
第25図版　中所遺跡２ｂ区弥生～古墳時代の遺構（東から）

三須・中所遺跡３区

民家の移転完了後調査を実施した。北側は平成11（1999）年すでに調査を終えており，その結果遺構はまばらであったが，本調査区も同様の状況を呈する。

住居址，土壙，柱穴等が検出されたものの，遺物は僅少で，時期が特定できる遺構は極めて少ない。住居址の他は古代の土壙等が若干確認された程度である。住居址は古墳時代のもので，東総社中原本線に接続し南方向へ延びる現道拡幅部分より検出された。現代の攪乱で破壊され，また調査面積も狭いため全容は明らかでない。

来年度は，当該調査区の西側を引き続き調査する予定である。（平井）



第27図　三須・中所遺跡３区遺構配置図（Ｓ＝1/300）

東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（富江・延地区）

遺 跡 名	真壁遺跡出之向地区	井手・袋ノ内遺跡
調 査 地	真壁129－10・11外	井手154－４，156－４，157－５
調査期間	平成13（2001）年10月１日～12月28日	平成14年１月15日～２月28日
調査面積	約750㎡	約1,000㎡

調査概要

一昨年度からの継続事業である東総社中原本線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は，国道429号線に接続する三須地区の調査から実施していたが，今年度は工事工程に合わせて地点を大きく変え，富江地区，井手地区の調査にも着手した。

この地区は，中央区画整理事業で建設された東総社中原本線に接続する部分に位置し，中央区画整理事業で調査された真壁遺跡の東端にあたる。以下に各遺跡の調査状況を記す。

（富江地区）

中央区画整理事業で東総社中原本線の一部はすでに建設されており，富江地区の工事はその東端に接続するものである。中央区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査では，ほぼ全域にわたり遺構が確認され，真壁遺跡として周知されているが，東総社中原本線部分東端付近は遺構もまばらになることから，当該調査予定地は微高地の端部にあたり，遺構の密度も低いものと考えられた。

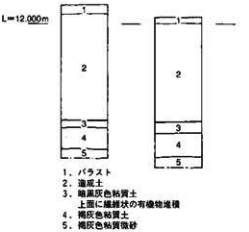
そのため今年度の調査予定地にまず試掘のトレンチを入れ，遺構の有無を確認したところ西寄り部分にはかなりの密度で遺構が存在することが判明した。また，道および民家を隔てた東側の駐車場部分では，進入路の関係や駐車の都合からトレンチ掘削箇所が限定され，北側部分にのみ第29図のような状況で試掘できたにすぎない。Ｔ－１は，グライ化し灰青色を呈しており，近世以降の瓦等を多量に含む攪乱部分で，湧水のため土層の図化はしえなかった。Ｔ－２・３（第30図）は共に堆積状況か

第28図　調査地位置図（Ｓ＝1/4,000）

ら低湿地と考えられる。以上のような堆積状況と，現時点での駐車場移転が困難なことから，駐車場部分は今回の調査の対象とせず，側溝工事時に南および北西部分の土層を確認し，遺構が存在した場合は調査することとした。

真壁遺跡・出之向地区

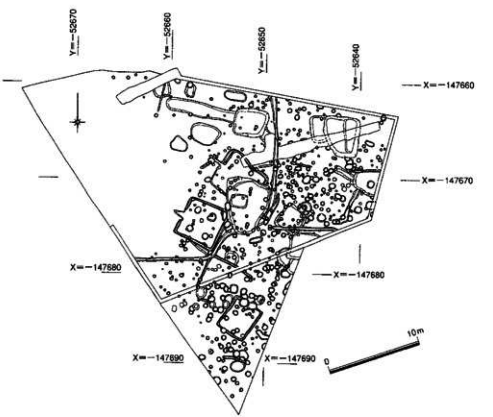
地形は北西部分が最も高く，表土下20cmで礫層が認められる。礫層は東，南方向に緩やかに下がり，その上層には東南部に粘質土が堆積し，さらに上層には全面に砂質土が堆積する。上下２面の遺構面が認められ，上層の遺構は砂質土上面で検出された。この面からは，古代～中世の遺構が多数検出され，建物，柱穴，土壙，溝等が認められた。そのうち土壙には，一辺が３ｍ前後を超えるような方形および方形に近いものが６基検出され，性格は不明であるが回転台型土師器椀，須恵器，磁器等が出土している。



第29図　Ｔ－２・Ｔ３土層断面柱状図（Ｓ＝1/40）

下層の遺構は古墳時代のものが中心で，竪穴住居址，土壙，柱穴等が検出された。住居址はすべて方形で，須恵器が出土しており，古墳時代後期の所産である。これら下層の遺構は西半部に集中している。

なお，北西部分の礫面からは，後世の削平を大きく受けているためか，遺構はほとんど検出されなかった。



第30図　真壁遺跡出之向地区遺構配置図（Ｓ＝1/400）

（延地区）

井手・袋ノ内遺跡

道を挟んで２筆が今回の調査対象となり，排土置場の確保のためそれぞれ南半，北半に分けて調査を実施した。

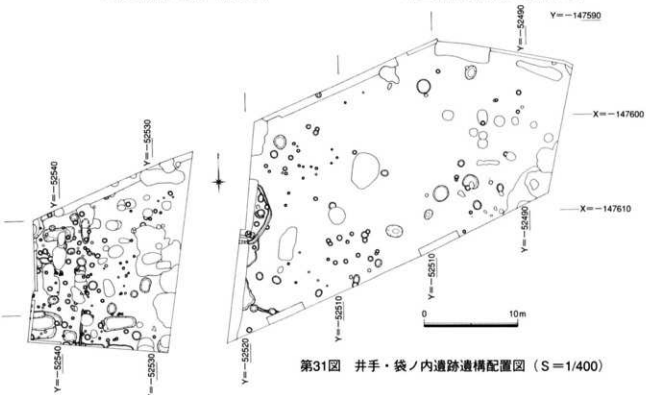
調査地は，全体に砂質の強い土層で，後世の削平を受けており，同一面で弥生時代～中世の遺構が検出された。西側は遺構密度が高く，東にいくにしたがって疎となり，東端付近は近世以降の攪乱以外遺構はほとんど認められない。遺構は，古代～中世の土壙，柱穴，弥生時代後期の住居址，土壙，柱穴，溝状遺構等が検出された。中には，弥生時代後期初頭の完形に近い土器を多数廃棄した土壙も認められた。

以上，富江地区と延地区の調査結果から，真壁遺跡・出之向地区は，真壁遺跡の東端にあたり，低位部を挟んで東側に別の微高地が広がり，その微高地上に井手・袋ノ内遺跡が存在したことが判明した。

（平井）

第26図版　井手・袋ノ内遺跡
土壙遺物出土状況（東から）

第27図版　井手・袋ノ内遺跡
東区北半完掘状況（西南から）



第31図　井手・袋ノ内遺跡遺構配置図（S＝1/400）

史跡整備事業に伴う鬼ノ城発掘調査

所 在 地　総社市奥坂1762－１外

調査期間　平成13（2001）年５月７日～10月25日

調査面積　約3000㎡

はじめに

鬼ノ城では平成16（2004）年度までの第１期整備事業として，西門から第０水門までの復元整備地区と，遺構表示地区である第４塁状区間から第２水門までの整備を実施し，以後は一般公開を予定している。そのため鬼城山整備委員会の指導・協議に基づき，西門から第２水門までの遺構の残存状況と，城壁線の確定を主たる目的として発掘調査を実施した。また遺構表示地区に設定されている北門は，平成９（1997）年度の確認調査によりすでに所在が判明しているが，整備のための基礎資料を得るため本調査を実施し，第２期整備事業へ備えることにした。

城壁線の発掘調査（西門～第２水門）

城壁線の調査では城壁前面と城内側の遺構が明らかになった。城外側では急斜面により流出，崩壊している箇所を除けば，ほぼ全域に外側列石・敷石と，城壁を構成する版築盛土，版築用の支柱と考えられる外側柱穴の一部を検出した。第３塁状区間に所在する高石垣は前面に厚く流土が堆積しており，これを除去した結果，全長約22m，高６m，傾斜角約73°の規模を有する事が判明した。その他にも重箱積みの状況や縦目地の入り方，石垣の端部を示す石材などの知見が得られた。

城内側では内側柱穴列と内側列石の一部，さらに内側敷石をほぼ全域で検出した。特に第４・５塁状区間の敷石は良好に残存していた事から，敷石本来の規格や勾配，段構成，作業単位とみられる縦横の目地についても観察できる。

第１～２水門間は流土が厚く堆積していたので外側敷石の前端を検出するに留めた。また敷石直上には焼土・炭化層が認められたため，整備委員会の指導を受けて数点の炭化木片を樹種鑑定している。

北門の発掘調査

北門は鬼城山の後背面に位置し，谷部を利用して構築されている。そのため左右に取り付く城壁は必然的に左右に張り出し，味方折れを形成している。城門の構造は掘立柱式で未検出の柱穴を含めて推測すれば間口１間×奥行き２～３間？と考えられ，柱形状は本柱に角柱を使用し他は丸柱であった。

この本柱間には石造加工物である門礎が配置され，端材にコ字形の刳形，方立，軸摺穴，蹴放しのセットが加工されていた。床面は全て石敷で，長方形材の配列と石材の規模により２区画が認められる。そして門の中央部には石組みの排水溝が構築されており，門礎の下部へと連なる状況を確認した。門の両壁面は城内からみてハ字形に開く石垣が構築され，東門や南門と類似している。

なお，城門の前面は既に自然崩壊して床石が崩落し，後世には門礎の中央石材が２石，倒立させられるなど攪乱を受け原形を留めていない。

城門に取り付く城壁は夾築式で部分的に外側列石と外側敷石を検出し，土塁内には内側柱穴や敷石状遺構も確認できた。特に門より北側の城壁は前面に石垣を積み，城内側にも下部に石垣を積んだ後に版築土塁を構築するなど城壁としては特異な構造であった。その他にも城内側には城門の背面に断面Ｌ字形の地山整形痕を検出したことや，城内山頂部からの排水を意図した溝も明らかになった。

なお発掘調査の詳細については調査概要が近刊予定のため，そちらに譲りたい。　（松尾洋平）

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺 跡 名　石原遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区，鷹尾手遺跡Ⅰ・Ⅱ区，上三本松遺跡

所 在 地　総社市三輪・真壁地内

調査期間　平成13（2001）年６月29日～平成14（2002）年４月４日

調査面積　約3,000㎡

調査概要

（調査経緯）

総社駅南部地域を対象とする区画整理事業に伴う平成13（2001）年度の発掘調査は，例年と同じく，工事工程に合わせながらの調査となったため，地点を変えながら複雑な調査工程となった。

はじめに石原遺跡，次いで鷹尾手遺跡Ⅰ区～Ⅱ区，最後に上三本松遺跡の順で調査を行った。

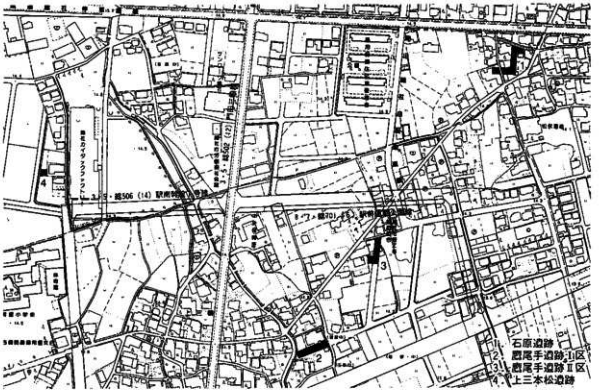
（調査概要）

石原遺跡

家屋等の移転にあわせての調査であったため，一度に全体を調査することができず，おおむね北・中・南（西）の三調査区に分けての調査となった。北の調査区では，茶灰色土の基盤層の上に，灰褐色土層・旧耕作土層の順で堆積しているが，南に行くにしたがい，基盤層の直上に中・近世水田層と推定される黄灰色の粘質土層が厚さ20cm強堆積している。検出された遺構は，弥生時代～古墳時代にかけての幅１～２ｍ程度の溝４と柱穴および中世の井戸等である。

鷹尾手遺跡

鷹尾手遺跡Ⅰ区の基本的な層序は，基盤層である茶灰褐色土層の上に60～70cmの厚さに中・近世水田層と推定される黄灰色の粘質土層が堆積しており，大小の溝，縄文時代と考えられる土壙が検出さ



第32図　調査地位置図（Ｓ＝1/5,000）

れた。溝のうち，最大のものは幅７～８ｍ，深さ60cmを測る。

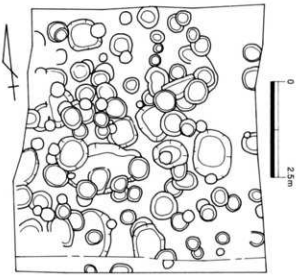
鷹尾手遺跡Ⅱ区の基盤層は細かい灰褐色土層であり，その上に厚さ10cm程度の中・近世水田層と推定される黄灰色の粘質土が堆積している。本調査地は，平成10（1998）年度に実施された調査地の北続きの地点である。その結果，平成10（1998）年度の調査で検出された，環濠の可能性が考えられる断面がＶ字状に近い幅約3.5ｍ，深さ約２ｍの溝の続きが検出された。この溝からは，前回の調査と同様，弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土している。

上三本松遺跡

上三本松遺跡の基本的な層序は，暗灰茶褐色土の基盤層の上に中世の包含層と考えられる暗灰褐色土層，近世の堆積層と推定される茶灰褐色土層が堆積している。

検出された遺構は，近接する駅南幹線１号道路・総社市立常盤幼稚園建設に伴う発掘調査で明らかになった状況と近似しており，古墳時代以降に形成されたと推定される微高地上に多数の柱穴・土壙が切り合いながら密集して検出された。

（高橋）



第33図　上三本松遺跡平面図（Ｓ＝1/100）

第28図版　石原遺跡全景

第29図版　上三本松遺跡全景

第30図版　鷹尾手遺跡Ⅰ区全景

第31図版　鷹尾手遺跡Ⅱ区全景

共同住宅建設に伴う発掘調査

遺 跡 名　諸上遺跡

所 在 地　総社市総社３丁目1213－１，1226－３番地

調査期間　平成13（2001）年７月30日～８月４日（確認調査），８月５日～16日（発掘調査）

調査概要

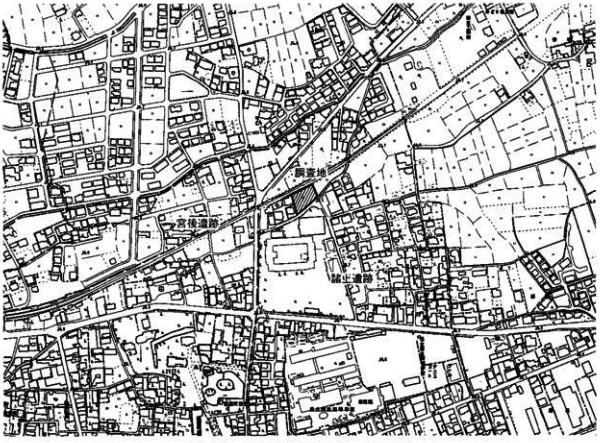
（調査経緯）

調査は，マンション（共同住宅）の建築確認申請にともなう事前審査で実施したものである。

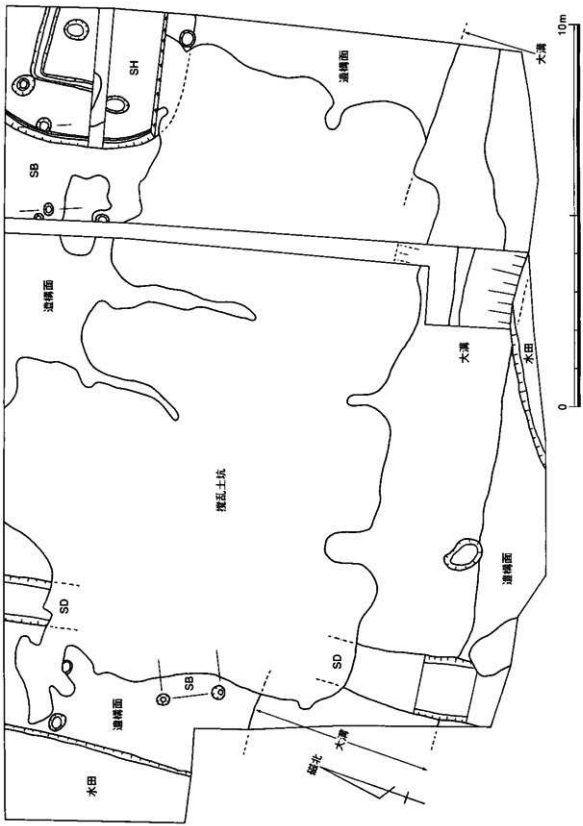
調査地は，市内中心市街地から東北約１km，総社小学校の北側，JR吉備線との間に位置する休耕田である。吉備線の敷設以前には線路北側の水田と１枚田であり，その北側には十二ヶ郷用水の一つ蛯田川が流れ，南にも小さな用排水路に接しているという地形である。

小字は，高畑と国府上道北。周囲をふくめ現況は水田であるが，高畑の小字からもともとは畑地で地下げの行われた結果によるものと推測される。国府上道北の小字は１筆１字にすぎないが国府に近接，あるいは国府道沿いに位置していたことによるものか。

周辺での調査例[1]は，それほど多いものではなかったが，西側に近接して宮後遺跡が所在し，また本調査地の南側，総社小学校プール改築において諸上遺跡が新規発見され，発掘調査が実施されている。とくに位置的にみて諸上遺跡に関連する遺構の存在が予測されたことから，試掘調査を実施した。その結果，土坑（のちに攪乱土坑と判明）が検出され，弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器片が出土したことから，再度建物範囲において遺構の再検出を行い，畔畦と水田・柱穴が検出さ



第34図　調査地位置図（Ｓ＝1/6,000）



第35図　遺構配置図（S＝1/100）

れたため，発掘調査を引き続いて実施した次第である。

（遺構・遺物）

検出された遺構は，撹乱土坑（確認調査時の土坑）・水田・畔畦・溝・掘立柱建物・柱穴・竪穴住居・弥生大溝である。

撹乱土坑は近代の瓦製造にともなう土取り。弥生土器・土師器・須恵器が含まれるものの，磁器と，燃し系の桟瓦が底近くより出土している。

第32図版　遺構検出状況

掘立柱建物は２棟，柱穴も単独の検出であるがいずれも建物の一部分と推測される。遺物には弥生土器を含むが，土師質土器が出土し，埋土も灰白色系が混入していることから，その多くが中世とそれ以降の時期のものと推測される。

竪穴住居は，調査区の北東端で検出され，北と東が調査区外，南が撹乱土坑で破壊され，西側でのみ住居の輪郭が確認できた。平面形は，ほぼ円形プランと推測される。規模は，内のりの推定で約5.0m。主柱の配置は，四本柱で，そのうちの２本が検出れさた。柱間は2.5mで掘形は40～70cmのやや楕円形，深さ８cmと20cmと少し差があり，土層断面から直径20cmの丸柱が立てられている。また中央やや北よりには炉が置かれており，長軸66cm・短軸50cmの楕円形，深さ20cmを測る。焼土・炭混じりの暗茶褐色粘質シルトの埋土であるが，焼土壁化は認められず，わずかに炉の東西辺の一部に淡赤色の焼成変化面が認められたにすぎない。さらに，四本柱の内側に沿って，最大幅36cm・深さ５cm以下の非常に浅い溝が方形にめぐらされており，住居内の区画が明瞭である。炉の位置が北に寄っていることから，住居の出入り口は南側になるものと推定している。

弥生大溝は，調査区南端部でほぼ東西方向に検出された。後世の遺構に切られているため，溝全体の状況はわからないが，土層断面から推測して幅3.5cm・深さ1.3mの溝になる。

（まとめ）

調査区の大半は，近代の瓦産業にともなう粘土採掘坑（撹乱土坑）により破壊されており，また検出された遺構もそれほど多くなく，水田・畔畦・溝・掘立柱建物・柱穴・竪穴住居・弥生大溝である。出土遺物の整理は洗浄も済んでいないことから，調査時の記録による判断となるが，大溝の下層中からは頸部に押圧凸帯をもつ壺形土器や外反する皿形の高杯形土器などが，上層中からは上方に拡張し

第33図版　弥生大溝

第34図版　竪穴住居

た口縁部に疑凹線を施した甕形土器があり，弥生中期末前後～後期末前後と推測される。竪穴住居は弥生土器を含むが，古式土師器系が認められるようで古墳時代初頭と推測される。このほか掘立柱建物や溝などは中世あるいはそれ以降のものと考えている。

表土直下で茶褐色系の遺構面が検出されること，攪乱土坑が茶褐色ブロックや灰白色系土により埋め戻されていることなどから，かなり広い範囲で土坑周辺の削平が行われたものであろう。

竪穴住居と大溝とでは時代差があるが，調査区の北側，十二ヶ郷用水路との間にその時期の集落が広がるものと推測される。また大溝は，現在調査区の南側に同じ方向の用排水路があることから，同様の機能をもった溝で環濠状となる可能性もある。集落は，小字が高畑であることからも居住区域となる想定ができ，その南東端に位置するものであろうか。（前角）

註　武田恭彰「共同住宅に伴う確認調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報７』1997年９月）
武田恭彰「総社小学校プール建設に伴う発掘調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報９』1999年12月）
平井典子「長野病院別棟建設に伴う試掘調査」（『総社市埋蔵文化財調査年報10』2000年３月）

テクノパーク総社拡張に伴う発掘調査

遺 跡 名　小造山西古墳群

所 在 地　総社市赤浜

調査期間　平成13（2001）年12月15日～25日

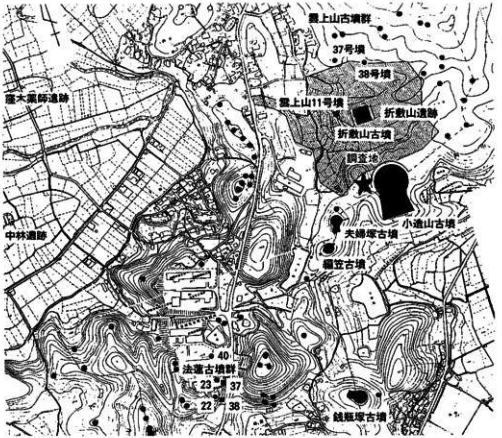
調査面積　460㎡

今回の調査対象となった小造山西古墳群は，岡山市との境界に連なる三須丘陵上に位置し，県下第8位にあたる142mの墳丘長を有する小造山古墳の西側裾部の緩斜面で，その存在が新たに発見された古墳群である。古墳群が所在する小造山古墳の西側から北側にかけては，平成2（1990）年度に行なわれた工業団地（テクノパーク総社）の造成工事に伴い実施された発掘調査により小規模な弥生の集落（折敷山遺跡）古墳1基（雲上山11号墳）が調査されている。

しかしながら，本古墳群が広がる小造山古墳の西側から北側にかけては，後世の果樹園で開墾等により墳丘が視認できなかったためか調査対象とされず，試掘調査も実施されないまま造成工事が行なわれた経緯がある。

平成13（2001）年12月に，このテクノパーク総社の南端の区画で操業する（株）小川製作所より業務の拡充に伴う工場敷地の拡張対象地における埋蔵文化財の有無についての照合があった。

この事を受けて，文化課では樹木の伐採後に重機を用いて確認調査を実施したところ，古墳（1号墳）の周溝を確認し，埴輪片多数が出土したことから地表では視認できない古墳が存在することが判明し，開発にあたっては発掘調査が必要である旨を事業者に回答した。



第36図　調査地位置図（S＝1/10,000）

この結果について文化課では事業者と保存を前提とした協議を行なったが，既に工事が発注済みであり，年内中の工事の完了が開発許可の条件である等の事情を鑑み，急遽，発掘調査を実施して記録保存の処置をとることとなった。

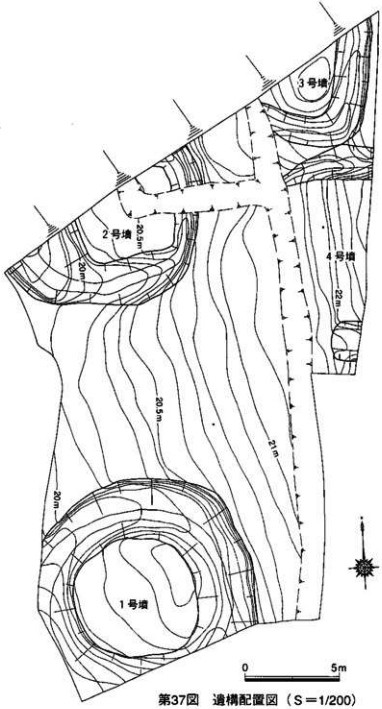
発掘調査は，重機を用いて腐葉土を除去した後に人力で遺構の検出を行い，当初確認された1基以外に3基，計4基の古墳の存在が明らかになった。

いずれの古墳も墳丘の盛土の大半は流出・削平されており，主体部が遺存していたのは1号墳のみで，さらに2・3号墳は平成2（1990）年の造成工事，4号墳は果樹園により墳丘を切断されており遺存状態は総じてよくない。

墳丘の形態と規模は，1号墳が直径9mの円墳であるのに対し，周溝を接して築かれた2～4号墳は一辺8m前後の方墳である。出土遺物は1号墳の墳丘から2本の円筒埴輪が検出された外，2・3号墳の周溝底面には須恵器の坏・坏蓋・壺が並んだ状態で出土した。

これらの遺物から推定される古墳の築城時期は5世紀末葉～6世紀初頭と推定され，近接する小造山古墳をあたかも盟主とするかのように引き続き周囲に密集して連綿と築かれた古墳群の在り方を明らかにした貴重な調査例となった。

なお，その詳細については，近刊予定の報告書中で改めて検討したい。　（武田恭彰）



第37図　遺構配置図（S＝1/200）

4．史跡整備事業の概要

鬼城山環境整備事業

平成13（2001）年度整備事業概要

鬼城山整備は平成５（1993）年度に「鬼城山整備委員会」を設置し，委員会の指導・助言を得て平成12（2000）年度に「史跡鬼城山（鬼ノ城）環境整備基本計画」を策定した。

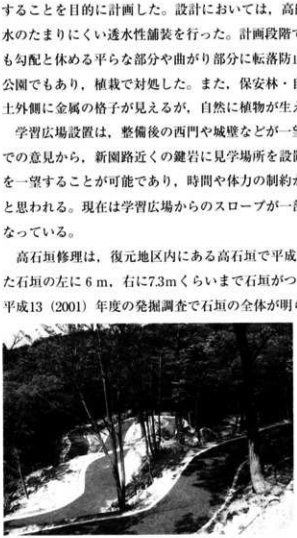
平成13（2001）年度からは文化庁の史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）として鬼城山整備を開始した。整備範囲は基本計画で復元地区とした角楼から第０水門までを中心に東は第２水門までの区間である。この整備の中心は西門の実物大復元であり，平成13（2001）年度では西門位置の地耐力調査と基本設計を実施した。この基本設計は文化庁の「史跡等の歴史的建造物の復元の取り扱いに関する専門委員会」で審議された。

また，平成13（2001）年度整備事業の実施設計を行うため，平成12（2000）年度に引き続き整備範囲の地形測量と石垣遺構写真測量を実施した。整備工事では入口部園路整備，学習広場設置，高石垣修理，城内敷石整備，パノラマ展望解説板・道標設置を実施した。

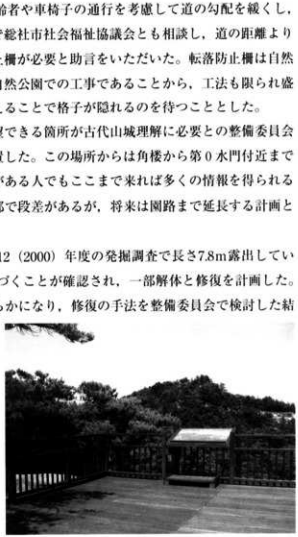
入口部園路整備は，整備工事などで既存の道を工事車両が通行することから，来訪者の安全を確保することを目的に計画した。設計においては，高齢者や車椅子の通行を考慮して道の勾配を緩くし，水のたまりにくい透水性舗装を行った。計画段階で総社市社会福祉協議会とも相談し，道の距離よりも勾配と休める平らな部分や曲がり部分に転落防止柵が必要と助言をいただいた。転落防止柵は自然公園でもあり，植栽で対処した。また，保安林・自然公園での工事であることから，工法も限られ盛土外側に金属の格子が見えるが，自然に植物が生えることで格子が隠れるのを待つこととした。

学習広場設置は，整備後の西門や城壁などが一望できる箇所が古代山城理解に必要との整備委員会での意見から，新園路近くの鍵岩に見学場所を設置した。この場所からは角楼から第０水門付近までを一望することが可能であり，時間や体力の制約がある人でもここまで来れば多くの情報を得られると思われる。現在は学習広場からのスロープが一部で段差があるが，将来は園路まで延長する計画となっている。

高石垣修理は，復元地区内にある高石垣で平成12（2000）年度の発掘調査で長さ7.8m露出していた石垣の左に６m，右に7.3mくらいまで石垣がつづくことが確認され，一部解体と修復を計画した。平成13（2001）年度の発掘調査で石垣の全体が明らかになり，修復の手法を整備委員会で検討した結



第35図版　新設園路



第36図版　学習広場

果，石垣でハラミやズレが顕著に認められた第０水門側は解体積み直しを行うが，西門側は極力そのままの状態を維持することとした。しかし，この高石垣が復元区間にあることから，欠落した部分の石垣復元については天場まで行うこととしたが，その範囲が不明であることから，平成14（2002）年度に石垣裏などの調査を行い検討することとした。平成13（2001）年度では石垣から転落した石材の引上げ作業を実施し，石材の置場なども必要なことから，発掘調査で生じた排土を利用し作業場造成などを実施した。また，城壁外の見学路を外側敷石沿いに設置する計画があることや外側列石の転落を防ぐ必要があるため，城外の傾斜地に木柵を設置し盛土を行った。

城内敷石整備は，第０水門東部分で良好な保存状態や敷設範囲の広い鬼城山を代表する敷石が認められることから，遺構露出展示に向けて敷石目地補強を行った。

来訪者の利便を図るため，解説板や道標の設置が必要であることから，今後設置するものについて統一した意匠を決めることとした。検討の結果，脚は木で文章部分はホウロウ焼き付けで実施することとした。今回は完成した園路に道標２基と第１展望所に展望解説板を設置した。

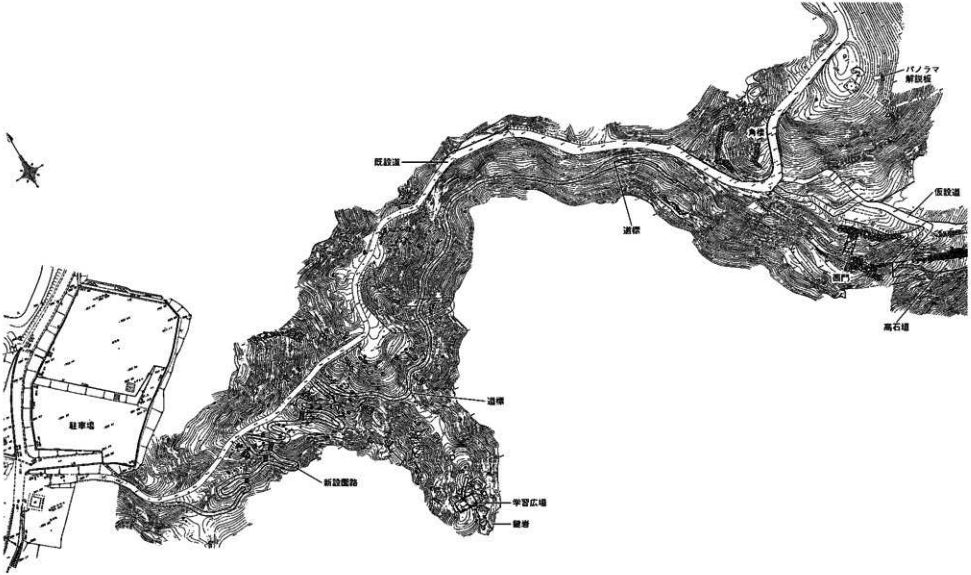
また，奈良文化財研究所に「古代土塁遺構の保存整備手法開発研究」を委託し，現地に暴露試験台を設置した。委託内容は，鬼城山整備は山城であり遺構の多くは露出展示となること，復元の材料が石と土であることなどから鬼城山に適した保存手法を探ることを目的とした。（谷山）

平成13（2001）年度事業経過

平成13(2001)年	3月1日	第12回鬼城山整備委員会（平成13年度整備事業および･西門復元(案)）
	4月20日	国宝重要文化財等保存整備費国庫補助金・県費補助金交付申請
	5月1日	史跡鬼城山環境整備実施設計・管理業務契約
		地形測量及び毎木調査，石垣遺構写真測量契約
	5月17日	第13回鬼城山整備委員会(平成13年度事業概要･工事概要･西門基本設計)
	6月13日	保安林解除許認可作業委託業務契約
	6月28日	補助金交付決定
	10月11日	第14回鬼城山整備委員会（平成13年度整備工事概要・西門基本設計）
	10月25日	土質（西門）調査業務契約
	10月30日	園路整備工事契約
	11月28日	西門再検討案について文化庁で協議
	12月27日	園路整備外（学習広場・敷石目地等）工事契約
平成14(2002)年	3月6日	園路舗装契約
	3月29日	竣工

第37図版　列石・敷石転落防止木柵

第38図版　石材引き上げ



第38図　平成13（2001）年度整備事業

5．付　　載

新谷武夫氏採集の瓦について

平成11（1999）年4月，総社市文化財専門委員であった故鷲見十三生氏から，当時岡山県文化財保護指導委員をされていた新谷武夫氏が，備中国分寺界隈で表面採集した瓦を保管されていることをご教示くださり，その資料を実見させていただく労をとってくださった。

新谷氏が保管されていた資料は，備中国分僧寺域から表採されたものが中心であったが，その他三須字河原から採集された軒丸瓦は三須廃寺跡から採集されたものと同型式であり，幻の三須廃寺を考える上で興味深い資料であった。新谷氏に，資料を実測し公表させていただくようお願いしたところ，快く承諾くださり，後日三須字河原出土の軒丸瓦をはじめ，表採された瓦を教育委員会までご持参くださった。

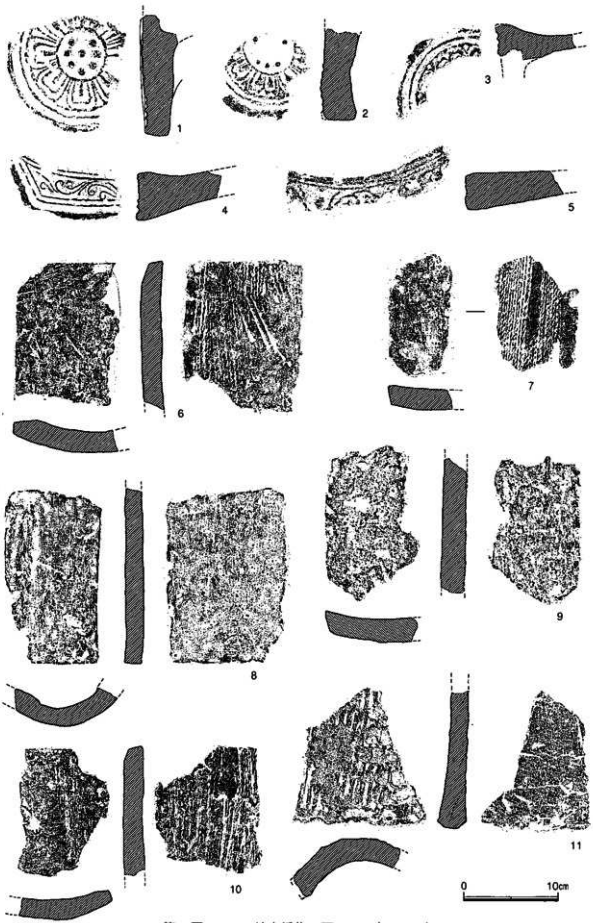
諸般の事情から資料の公表が遅延し，鷲見氏がご存命の内に形にすることができなかったことが悔やまれてならないが，紹介していただいた鷲見氏，資料の公表をご快諾くださり，採集状況をはじめ様々なご教示をいただいた新谷氏に心より感謝するしだいである。

A・A'地点採集の瓦

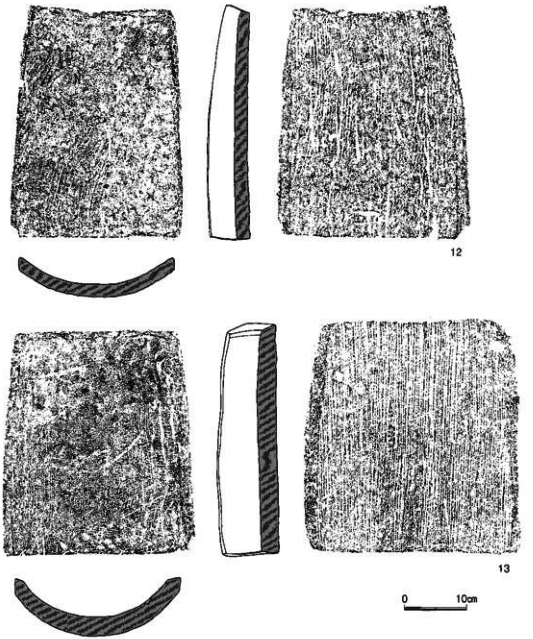
A地点は国分僧寺の寺域内にあたり，図示した瓦のうち3を除きすべてこの地点から出土したものである。3は寺域から200m以上離れたA'地点から採集されており，この付近には古式の瓦片が多数散見される。新谷氏によると水田の暗渠用排水溝に敷設するため，国分寺から瓦を集めこの地に運び込んだとのことである。このことから，国分僧寺の出自である可能性が極めて高いことと1点のみの出土であることから，3を寺域内採集資料と共に図示した。

1～3は軒丸瓦である。1は単弁の8弁蓮華文で，中房には中央に1，1箇所を欠くものの周囲に8の蓮子を配する。総社市史で葛原克人氏が備中国分僧寺の軒丸瓦を分類し（葛原克人1987），第1類とされた創建時の瓦である。にぶい黄橙色（10YR7/3）の色調を有する。2は灰白色（10YR8/2）

第39図　採集地点位置図（S＝1/20,000）



第40図　A・A'地点採集の瓦<1>（S＝1/4）

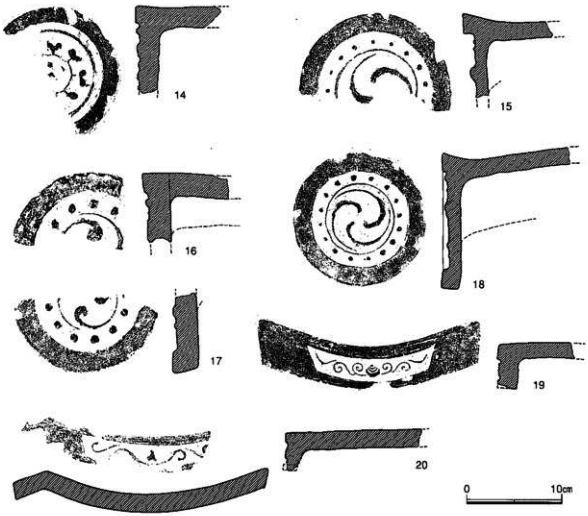


第41図　A・A'地点採集の瓦<2>（S＝1/6）

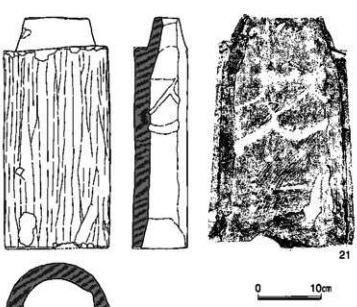
を呈し，単弁と複弁を交互に組み合わせ蓮華文をなすものの，外区外縁に鋸歯文が施されないことから葛原氏分類の第3類にあたる。3は瓦当部を大きく欠くが，一部に単弁と複弁が交互に配置されている状況が認められることと，外区外縁に鋸歯文がみられないことから第3類に相当する。色調は浅黄橙色（10YR8/3）をなす。2，3は奈良時代末葉の所産と推定される。

軒平瓦は4，5の2点が採集されており，4は三転の均整唐草文を有する黒色（N2/）硬質の瓦である。5は，全体に磨耗が著しくまた瓦当を大きく欠くため文様は不明瞭であるが，中心飾りから左右に唐草文が反転していくものと思われる。須恵質で，色調は灰白色（10YR7/1）を呈する。

6～11は平瓦の破片である。9は摩滅により凹面の調整が不明であるが，他はすべて布目が認められる。そのうち6と10は，布目を大きくナデ消している。また6は，ケズリ痕跡と思われる砂粒の動きもみられる。凸面にはいずれも縄目のタタキが認められる。



第42図　A・A'地点採集の瓦<3>（S＝1/4）

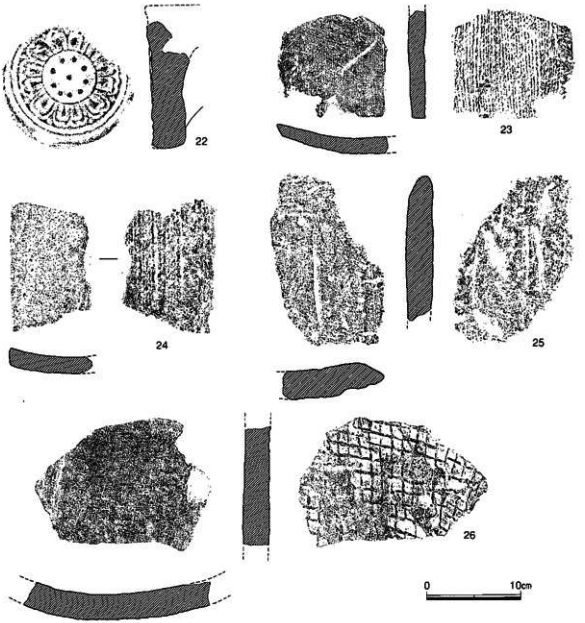


第43図　A・A'地点採集の瓦<4>（S＝1/6）

丸瓦11は，凸面に粗い平行タタキを施し，凹面には布目が残存する。須恵質で，粘土紐の接合部が明瞭に確認できる。

12，13は完形の平瓦であり，12の凹面は，布目を板状工具によって部分的にナデ消し，凸面には縄目のタタキを施す。色調は暗灰色（N3/）を呈する。13は淡黄色（2.5Y8/3）で，凹面にやや粗い布目を留め，凸面には縄目のタタキがみられる。

14～21は，桃山期～江戸期の所産と思われる瓦である。14～18は軒丸瓦で，このうち14は，葛原氏



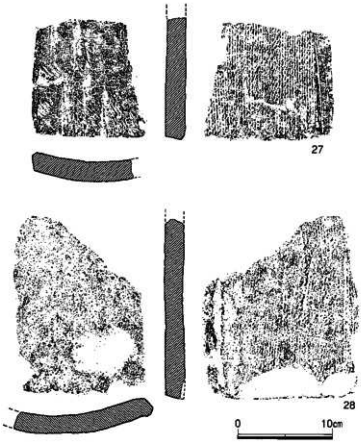
第44図　B地点採集の瓦（S＝1/4）

が7類に分類した内区に双葉状の文様を配する須恵質の瓦である。15が右巻き三ツ巴で，他はすべて左巻き三ツ巴である。このうち15・18は内・外区を画する圏線を有し，外区の珠文も小振りで数が多く，古式の様相を呈する。

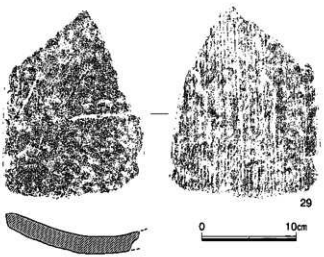
19は軒平瓦で，中心飾りに凸線宝珠をもち，左右に二転の唐草文を配する。両端には「く」の字状の凸線を有する。20は軒桟瓦で，中心は逆ハート形宝珠で飾られ，左右に二転の唐草文が描かれる。

完形の有段式丸瓦21は，凸面にケズリ痕跡が認められ，凹面は布目を板状工具で部分的にナデ消している。

15～21はいずれも燻し瓦であるが，18，19，21以外は炭素の吸着は顕著でなく，21も部分的には炭素の吸着が弱い箇所も多い。



第45図　C地点採集の瓦（S＝1/4）



第46図　D地点採集の瓦（S＝1/4）

B地点採集の資料

総社市上林字松井から出土した瓦である。国分僧寺の寺域からは外れるが，A'地点の例もあり国分僧寺関連の資料である可能性は高い。

軒丸瓦22は，単弁と複弁を交互に配した蓮華文を有し，外区には鋸歯文は認められない。やや軟質で灰白色（N8/）の瓦当裏面には，丸瓦を接合するための溝を設けている。A・A'地点採集の2・3と同型式で，葛原氏分類の第3類に相当する。

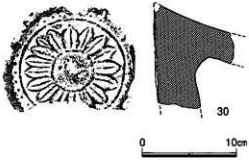
23～26は平瓦で，23～25はいずれも凹面に布目，凸面に縄目のタタキが認められる。23は硬質で灰白色（N8/）を呈する。28は凹面に布目が残存し，凸面には格子のタタキを施す。灰色（10Y5/1）の色調を有する須恵質の瓦である。

C地点採集の瓦

山手村宿字クモノキュウの水田から採集された資料である。

平瓦が2点採集されている。いずれも凹面には布目，凸面には縄目のタタキが認められるが，30の凹面は磨耗が著しい。29は灰白色（10YR8/1）を呈し，硬質である。

この地は国分僧寺から600m以上離れているが，これらの資料はA'地点と同様，国分僧寺跡から持ち込まれた可能性が考えられる。新谷氏のご教示により，A'地点に再利用のため国分寺の瓦が持ち込まれたことが明らかになったことから，A'地点だけでなく広く周辺地域に流出している可能性は十分に考えられ，この付近の瓦の採集地点に関しては留意する必要があるものと思われる。



第47図　E地点採集の瓦（S＝1/4）

D地点採集の瓦

平瓦１点のみではあるが，備中国分尼寺の寺域から採集された資料である。灰黄色（2.5Y7/2）軟質の瓦で，凹面は布目を一部ナデ消しており，凸面には縄目のタタキを施す。

E地点採集の瓦

三須字河原971の水田から採集された軒丸瓦である。単弁の17弁蓮華文で，花弁は１ヶ所のみ小さな弁を付け足したように表現されている。また，花弁の間に鋸歯文状の文様が１ヶ所認められることも特異である。外区外縁には鋸歯文を施し，外区内縁には小さな珠文を多数連ねている。中房の蓮子も小さく，すべて文様の隆起は低い。これらの諸特徴をもって，三須廃寺跡出土の軒丸瓦（葛原1987）と同型式であるといえる。硬質でにぶい黄色（2.5Y6/3）を呈する。

三須字河原では，平成８（1996）～平成９（1997）年度にかけて実施したほ場整備に伴う発掘調査によって，建物群や「郡殿」と墨書された土器が検出されており，三須河原遺跡として郡衙関連の遺跡であることが判明している（武田泰彰1997・1998）。採集地点は，建物群が発見された場所から約350m東に位置するが，周辺の状況からみて官衙に関連する遺物の可能性が高い。

また，三須廃寺については，平成12（2000）年度の東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査で，寺の北限を画するものと推定される溝が，東西方向から北東コーナーにわたって検出された（平井典子2001）。この区画溝の西側は平成14（2002）年度に調査されたが，当初の想定と異なり溝の北西隅は約半町付近で南に折れ曲がっていた。寺としては規模が小さく塔心礎も発見されていないことや，三須字河原の表採資料に同型式の軒丸瓦が存在すること等から，郡衙関連の何らかの施設である可能性も考えられる。

ただし，表採資料につては国分僧寺の瓦のように二次利用され周辺に流出する例もある[註]ことから，今後の周辺の調査に留意し，遺跡の性格を探っていきたい。（平井）

（引用・参考資料）
葛原克人1987「備中国分僧寺跡」『総社市史　考古資料編』
葛原克人1987「三須廃寺」『総社市史　考古資料編』
武田泰彰1997「三須地区県営は場整備に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』７
武田泰彰1998「三須地区県営は場整備に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』８
平井典子2001「東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）」『総社市埋蔵文化財調査年報』11

註

暗渠用排水溝に敷設するため利用された国分僧寺の瓦は，扁平なものが使用されているが，三須字河原採集の資料は扁平な瓦当部だけでなく丸瓦部分も残存しているため，敷設には不適切と考えられ，暗渠用に運び込まれた可能性は比較的低いものと思われる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	12
編著者名	谷山雅彦，平井典子，武田恭彰，前角和夫，高橋進一，松尾洋平
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192　岡山県総社市中央一丁目1番1号　TEL0866-92-8363
発行年月日	2003年

総社市埋蔵文化財調査年報　12

平成15（2003）年3月20日　印刷
平成15（2003）年3月25日　発行

編集発行　総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印　刷　柳本印刷株式会社